

オーバーロード～狼  
(以下略) ～その他まとめ

ぶーく・ぶくぶく

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

こちらは「オーバードゥ狼、ほのぼのファンタジーライフを目指して」<http://syosetu.org/novel/61986/>の小話、パラレルcのまとめとなります。

# 目次

第15話＋1回想：トップブリーダーはウルベルト	1
第18話＋1パラレル時空：女々しい野郎どもの歌	6
第19話＋1パラレル時空：バッドエン DOTZアー	13
第20話＋3パラレル時空：お風呂談義	17
第21話＋1パラレル時空：ふれあいです	25
定例報告会	33
第22話＋1パラレル時空：ゲヘナ打ち上げ会	33
第29話＋1：パラレル：ゆく年くる年	42
第29話＋2：パラレル：ゆく年くる年2	47
ジロリアン、フレーパーティー	56
クルミ割り。牛フンケーキ。	64
第9層寝室。食堂7：14	70
パウードスーツの可能性を求めて	76
農業会議と蜜蝋キャンドルと昼寝	79
夕飯は養殖魚のムニエル	86
至高の模擬戦	91

餌付けと蒼褪めた乗り手。 | | | 94

至高の模擬戦（リサイクル）口は禍の元

99

至高の御方も愛用！ | | | 104

漆黒の剣の昇格 | | | 107

疾風走破 | | | 110

メンバー召喚の可能性 | | | 115

東の巨人 | | | 118

疾風走破2 | | | 125

焼き石風呂 | | | 130

カヌレせんか？ | | | 135

ゴブゴブゴブ？ | | | 139

埋もれ木 | | | 146

デトネーション波あッ!! ってカツコイイ

よね？ | | | 150

新年の祭りどうしましょう。 | | | 153

うまい！うまい！ | | | 156

宴だッ！ | | | 159

新人研修 | | | 164

オーガ料理は君に決めた！ | | | 169

豚肉竜骨スープ | | | 174

戦闘狂はMつケたつぷり | | | 178

その頃のカルネ・ダーシユ村：時王

185

トーナメントはやらないよ！ | | | 189

## 第15話＋1回想：トップブリーダーはウルベルト

その日、ジョンは第六階層の闘技場に仰向けに倒れて大きく息をついていた。

仮想世界である以上、本来そこまで疲れるものではないのだが、自分に出来る限界まで集中し続けたPVPは、思った以上に体力を消耗させたようだった。

「うーん、覚えてはいるけど戦闘中には思い出せないようですね」

ひっくり返ったジョンに困ったような声がかけられる。

アインズ・ウール・ゴウンの諸葛孔明の異名を持つ、ぷにっと萌えの異形のアバターがジョンを覗き込む。

「焦りは失敗の種であり、冷静な論理思考こそ常に必要なもの。心を鎮め、視野を広く、考えに囚われることなく、回転させるべきではありませんが……。ジョンくんは集中力はあるのに思考が追いつかない？ 集中し過ぎて一つの事しか考えられないと言った感じでしょうか」

ぷにっと萌えには、ジョンの頭では相手の初動を読むだけでリソースが尽きてしまうと言う事が、今一つ理解できないようだ。

珍しく困っているぷにっと萌えに代わり、先日、ワールドディザスターとなったウル

ベルトが、今までジョンと戦闘訓練と言う名のPVPを行っていたワールドチャンピオン。純銀の聖騎士。たち・ミーに、ジョンの動きの感想を聞く。

「たち、直接やりあった感じはどうだ？」

「……一つ一つの動きは反復練習で身に着いている。攻撃に対する受け、回避も的確です。けれど、数手先を読んで攻撃の組み立てが出来ていない。だから、フェイントを掛けるまでもなく、こちらの意図した流れに乗ってしまい最終的に詰んでいます」

悪い点を指摘する為だろうか。

いつもより歯切れ悪く、けれど対戦で自分が感じた点をきちんと話すたち・ミー。とつさの判断力が……それよりも素直すぎる性格が……でも、私達は別に効率だけを考えてゲームをしてるわけじゃないんですから。

如何すれば良いか話し合うギルメンだったが、本人の能力によるところが大きい為、結局は勝敗だけが全てではないと落ち着こうとしていた。だが。

「たち。たかがゲームだけど、それを決めるのはお前じゃないぜ？ ……ジョン、お前

はどうなんだ？ たかがゲームに、お前は誇プライドりを掛けるのか？」

「俺も強くなりたい」

上体を起こし、真っ直ぐにウルベルトを見つめるジョンの視線に、最強の悪の魔法使いを名乗る男は笑った様だった。

「じゃあ、先ずは認める。お前は弱い。頭も弱くて、俺やたつちのように数十手先を考えて戦えない」

「ウルベルトさん！」

だから、とウルベルトは制止の声も振り切って言葉を続けた。

1. 大志を抱け。

2. 目標達成の為の努力を怠るな。

3. 失敗しても気にするな。

4. 常に組織で行動しろ。

5. どんな時でも笑っている。

「これを常に考えろ。1は別に大きな目標じゃない。今回なら、たつちに右ストレートを当てるで良い」

「ああ、そう言う事か。そうだね、ジョンくん。たつちさんに右ストレートを当てるには防御を掻い潜るか、たつちさんが防御も回避も出来ない体勢にすれば良い。……ここまでは良いかな？」

ウルベルトの五か条に本人ジョンよりも、ぶにと萌えが先に気がついた。

つまり、どう考えるかの思考回路が出来ていないから、反復練習で考える回路を頭に造る。造る為に常に考えろ。一発の攻撃を当てる為に、どう動き、どう避けられたら、次

はどうするかを予め考えておけ。無数に考えておけば、その何れかを使える場合もあるだろうと言う力技。

ぷにっとなげに遅れて、それに気づいたたち・みーが後を引き継ぐ。

「剣と盾を持った私に右ストレートを当てたいなら、振り下ろした腕が邪魔で盾が使えない位置に回避しつつ、自分は攻撃できる位置に移動する。私からすると何処に避けられると困るのかを最初に考えるんだ」

「戦闘とは他人がやられて嫌な事を、相手が動かなくなるまでやり続けるものだよ」

二人の言葉にジョンが頷くと、今度はたち・みーが剣と盾を持っている側からすると、どうされると嫌なのかを動きを交えてジョンに説明し始める。

どう動き、どう回避して、そこに持つていくのかを話し合い。もう一度、その動きをなぞって組み手を行う。組み手ではあるが、今度は最後にジョンの拳がたち・みーの鎧に届いた。

「あ、当たった」

やっと当たった拳を感慨深げに嬉しそうに見つめる人狼を微笑ましく眺めるぷにっとなげとたち・みー。

口の悪い自称最強の悪の魔法使いは、やれやれと肩をすくめて言った。

「後は常に考える癖をつける事だな。普段の生活、仕事で相手が何を考えているのか、何

をされると嫌なのか。ジョンは覚えが悪いけど、何万回もやれば、パターンも増えて無意識に出来るようになるだろう……多分な」

ウルベルトさんは教え方が上手いですね。

教師に向いてるんじゃないですか？

誰があんなものになるかッ!!

その日からジョンは相手が何を思っているのか想像しながら戦うようになってた。

努力が芽吹き、実を結ばなかったが、それでもジョンは仲間の教えを真摯に愚直に守り通した。

数年を経て、それはようやく実を結んだ。

勝率1割を切っていたPVPは2割を超え、最終的には3割に届こうか言うまでになつていた。

彼は誇自念りを貫き通したのでした。

## 第18話+1パラレル時空：女々しい野郎どもの歌

これはパラレル時空でフィクションWです。本編および他所様の作品、ストーリーには一切関係ありません。

以上をご了承の上、お楽しみ下さい。

／＊／

ナザリツク地下大墳墓第九階層。ロイヤルスイート。

キノコ頭の副料理長のシヨットバーをイメージした部屋は、落ち着いた照明が室内を照らし、酒を並べた棚にカウンター。椅子の数は僅かに八つ。

常連と呼べる者は片手で数えられる程度だったが、まれに至高の御方々が訪れる事もあった。

そんな夜は、決まって朝を迎えて考え込むのだ。

はて、自分の仕えるナザリツク地下大墳墓にお残りになられた至高の御方は、お一人だったか？ それとも……お二人だったか？ と。

「モモンガさん、アルベドさんと同棲し始めたんですって?」

「……アバ・ドンさん賛成377って、どう言う事ですか?」

今宵の来客は、至高の御方のまとめ役であるアインズ・ウール・ゴウン……至高の御方々の間では以前と同様にモモンガ……が、魔法で黒髪黒眼の青年の姿で。その隣には外骨格をメタリックグリーンに輝かせるアバ・ドンが禍々しい相貌からは想像出来ないほど穏やかな様子で席についている。

副料理長はグラスを磨きながら、至高の御方をお迎えできる喜びに身を震わせつつ、至高の御方の会話を邪魔せぬように、けれど、カクテルなど即座に対応できるよう、注意深く慎ましく控えていた。

「あれはタブラさんが『ゲームなんだからアルベドの私室とか要らないだろう』って言ったんですよ。そしたら……『モモンガさんの嫁だから、モモンガさんの部屋で良いんじゃないね?』と、ジョンさんが言い出したのですが……」

「ちよっつツツ!! アバさん!!!」

モモンガを挟んで反対側に座っていた青い人狼が慌てた声を上げた。

「ほう、駄犬。……貴様か」

「モ、モモンガさん、魔王、魔王になってる!!」

楽しそうにじゃれあう二人を微笑ましく見ていると、キノコ頭の副料理長が鮮やかな緑色のカクテルを差し出してくれる。微かに立ち昇る気泡が良いアクセントだ。

「メロソリキュールをベースとしたカクテルでございます」

「頂きます……お二人とも少し静かに。副料理長に叱られますよ?」

アバ・ドンの声に、気まずそうに副料理長へ軽く頭を下げる二人。

副料理長は、至高の御方々同士ではラウンジや酒場で会話をしながら飲むと言うわけにもいかないでしょうと答え、それに何か心当たりがあるのかジョンは頭を掻きながら「助かる」ともう一度、礼を言った。

その後、しばらくカクテルをちびりちびりとやりながら、なんとも無しに静かな会話を続けていた。

／＊／

「……良いなあ。同棲か」

アバ・ドンが、モモンガを羨む様な感じに誰とも無しに呟いた。

勿論、隣に座っているからモモンガにも聞こえるわけで、気遣いの出来るモモンガギルママスは、そんなアバ・ドンへ軽い感じで提案した。

「言い出せないなら、私からエントマに言いましょうか？　ルプスレギナもカルネⅡ  
ダーシユ村の常駐にしましたし」

「なん、だど？」

まさかのモモンガ暴露にジョンが愕然とした声を漏らす。

「何か、ジョンさん？」何か得意げなモモンガ。

「モモンガさん！（・▽・）bグツ!!　玉座の間でアルベドをフ〇〇クして良いぞ！」

「それ、アルベドしか喜ばないでしょ!!」

まったく、段々アルベド見たいな事を言う様になってきて……ぶちぶちと気兼ねなく  
文句を言えるモモンガが微笑ましい。

その姿を横目で見ながら、アバ・ドンは命令はちよつとなーと、口にした。

「命令とか何か違うと思うんですよ」

「でも、元々が対等じゃないんだから、命令してやらないとエントマだつて行動に移せないぞ」

基本がグループ・アニマルの為か、ジョンはある程度は命令して行動させないとNP  
C達が困ると言う。

「それにですね！　同棲なんかしたら、俺はエントマちゃんに良からぬ事をしてしまう  
かもしれない！」

アバ・ドンの真摯な紳士的な発言に、骸骨と人狼は揃って、「え？」と答えた。  
なんと失礼な奴らだろう!!

「……するの？ っつか出来るの？」

ジョンがモモンガの向こうから、真顔で大変失礼な事を抜かしてくる。

良し、駄犬には蟲玉をご馳走してやろう。

「いやだつて、俺たち童貞と厨二病を拗らせたヘタレ異形種だよ。今更そんな同棲した程度で、間違いを起こせるの？ モモンガさんをご覧よ。何も間違いの無い清い交際を、サキユバスと続けてるよ」

アバ・ドンは思わず、人間形態になっているモモンガをまじまじと見てしまった。

言われてみれば……骸骨なら兎も角、生身の人間になれるようになったのに、モモンガさん間違いを起こしてないんだよな。

セバスですら、現地で女の子拾ってくるのに。

「そう言うジョンさんは、どうなんですかねえ？」

♪ ( ε、 )

恨めしげな、ドスの効いたモモンガの声に、ジョンは口笛とそつぽを向くことで答えた。



常に精神作用効果無効が効いているので楽しい感情も抑制されてしまうが、それでも仲間との楽しい語らいは心を明るく、軽くしてくれるようで、アバ・ドンは普段は言えない事も口の上らせる事が出来た。

「やっぱり本能なんかには負けたりしたら、エントマちゃんを傷つけかねないのが怖いですよ」

それに対して真剣な表情でジョンが訪ねてきた。

「……エントマは蜘蛛人<sup>アラクノイド</sup>だけど、アバさんは未確認<sup>グ</sup>生命体<sup>ロ</sup>でしたよね？」

「そうですね？」

「アバさんって両性？」

「は？」

「ジョンさん？」

予想外の質問に間の抜けた声で返してしまう。モモンガも何言ってるんだこいつと言う表情でジョンを見ている。

「いや、蜘蛛<sup>くも</sup>とか蠍<sup>かまきり</sup>って交尾の時に雄を食べてしまうから、アバさん食欲的な意味で、エントマを傷つけかねないって心配してるのかなと思っただけ……」

エントマに齧られてもレベル補正で、アバ・ドンは痛くも痒くもない……と言うか、かすり傷一つ負わないが、逆では確かに不味いだろう。

流石に源次郎さんもそこまでは許可をくれたつもりはないだろうし。

だから、ジョンとしては、アバ・ドンが何か難しく考えているようなので、何か昆虫種系独特の問題でもあるのかと訪ねたのだ。

それに対しアバ・ドンは「ああ、成る程……」と一つ頷くと何事か考え始めた。

「待って！　そこで黙らないで！　怖いよ!？」

そうして、時に静かに、時に騒がしく、至高の御方々の夜は更けていった。

／＊／

——時折、決して交わらぬ世界と世界を繋ぐ、不思議な扉が現れることがある。

——その扉を潜った先では、決して出会わぬ筈の至高の御方々が杯を交わす。

——不思議な、一夜限りの夢があるらしい。

## 第19話＋1。パラレル時空：バッドエンドツアー

これはパラレル時空でフィクションWです。本編および他所様の作品、ストーリーには一切関係ありません。

以上をご了承の上、お楽しみ下さい。

／＊／

ふわりという空気の流れの変化に、『プラチナム・ドラゴンロード』の二つ名を持つ、最強のドラゴン、ツアインドルクスⅡヴァイシオンは浅い眠りから意識を取り戻す。

その意識の中を驚きが大部分を占めていた。

自らの広範囲に及ぶ、知覚領域を乗り越え、身近に迫った存在に対する驚きだ。覚えの無い雰囲気をつアアは感じ取りながら、その目をゆつくりと見開いた。

そこには、六大神とも八欲王の再来とも取れる行動をしている百年毎の来訪者。

ユグドラシルのふれいやー、人狼ジョンの姿がそこにあつた。

「君は……」どうしてこの場所が？ 何を思っただここに？

続けた言葉は色々あった。

だが、彼が自分の守る八欲王の八武器を狙って来たのであれば、巨大爆発を持ってしても彼を止めなくてはならない。

場合によっては広範囲の生物を巻き添えにしなくてはならない事を、秘かに覚悟するツアー。

そこへ人狼ジヨウは散歩で出会った友人に声を掛ける気安さで声を掛けてきた。

「流石に竜王は強そうだ。一つ頼みたい事が有って来たんだけどさ。話は聞いて貰えるかな？」

アイテムを狙うものにありがちな粘つくような気配もなく、気安く声をかける様子。訝しげにツアーは目を細めた。

「それが答えられる事であり、出来る事であるのなら」

「そっか。俺、ドラゴンステーキが食べたいんだよ。尻尾貰っても良いかな」

「は？」

今なんと言った。このふれい人いや狼は？

尻尾？ 食べる？ ドラゴンを？

鱗や牙を欲しがったものは知っているが、ドラゴンを食べる？

この世界で最強の種族であるからこそ、ツアーは捕食者の立場になった事はあつて

も、非捕食者になった事はなかった。

八欲王達との戦いとて、殺し殺されの戦いであって、喰うか喰われるかの戦いではなかったのだ。

「いやいや、ちよん切ったら、ちやんと治癒はかけるよ。出来れば、ハラミとか  
リブ<sup>胸</sup>ロースとか、ランプ<sup>尻</sup>なんかも食べてみたいんだけど、それは嫌だろう」

「尻尾だつて嫌だけどね」

この人狼は、ドラゴンの尻尾をトカゲの尻尾と混同してるのだろうか。

背骨周りの肉が喰いたいとか、それは死ねと言っているのか。

らしくもなく、ぐるぐる考えるツアーに向け、人狼は両手を挙げると宥めるように振ってみせる。

「ああ、分ってる。分ってるからこそ……今から戦おうぜ。お前が勝ったら今回は諦めて帰る。俺が勝ったら戦利品に尻尾は貰う。治癒は掛けるけど、直ぐに掛けると尻尾がなくなるから、加工するまでの間、少しだけ痛いのは我慢してくれよ」

「いやいや、君は何を言ってるんだ？」

「何って？ お前こそ何を人間みたいな事を言ってるんだ？ 俺は竜王を食べてみたい。戦ってみたい。お前は食べられたくない。なら、戦うしかないじゃないか」

「……野生の獣なら正しいのだろうけどね」

「服を着てれば文明的か？ 人間なんて服きてるが、歴史を重ねる程にやることえげつないぜ。俺達はずっと単純で良いんだよ。ほらほら、戦わないなら尻尾ちよん切るぜ」  
 やれやれと肩を竦める人狼だったが、ツアーの側からしても、これほど話の通じない  
 ぷれいヤーは初めてだった。

アイテムでも、ハーレムでもなく、ただ本気で自分<sup>魔王</sup>を喰らってみたくて襲い掛かってくる。これまでのぷれいヤーとは<sup>の落差が</sup>あまりに<sup>酷</sup>違いすぎる。

これは本当にぷれいヤーなのか!?

それから数日間、アーグランド評議国では巨大な咆哮と地響き、巨大生物同士の戦闘音が鳴り響き、終には「ウアーツ！」との叫び声が響いたと言う。

／＊／

「ジョンさん、アーグランド評議国から抗議文がきてるんですけど？」

「……出張ダーシュ村0円食堂」

「ふざけんな！ 永久評議員を襲って尻尾ちよん切るとかテロリストだろ！」

「野生の狼と野生の竜が戦っただけなのです（ー、ドー）キリッ」

## 第20話＋3。パラレル時空：お風呂談義

これはパラレル時空でフィクションWです。本編および他所様の作品、ストーリーには一切関係ありません。

以上をご了承の上、お楽しみ下さい。

／＊／

ナザリック地下大墳墓第九階層。ロイヤルスイート。

キノコ頭の副料理長のシヨットバーをイメージした部屋は、落ち着いた照明が室内を照らし、酒を並べた棚にカウンター。椅子の数は僅かに八つ。

常連と呼べる者は片手で数えられる程度だったが、まれに至高の御方々が訪れる事もあった。

そんな夜は、決まって朝を迎えて考え込むのだ。

はて、自分の仕えるナザリック地下大墳墓にお残りになられた至高の御方は、お一人だったか？ それとも……お二人だったか？ と。

「風呂が…面倒です」

「クーゲルシュライバーさんも洗うの大変そうですね」

今宵の来客は、至高の御方のまとめ役であるアインズ・ウール・ゴウン……至高の御方々の間では以前と同様にモモンガ……が、魔法で黒髪黒眼の青年の姿で。その隣には席を4人分程も占有しながら、至高の御方の記録役であるクーゲルシュライバーが黒檀色の甲殻に覆われた、逞しい人間状の上半身をモモンガとカウンターに並べていた。

「大変って……クーゲルさん、蜘蛛のお腹に手え届くの？」

モモンガを挟んだ反対側では人狼、ジョン・カルバインが身を乗り出して、クーゲルシュライバーの巨大な蜘蛛の身体と人間状の上半身を見比べていた。

ジョンには柔軟性が如何とか以前に、物理的に手が届かないように見える。

「無理ですよ」肩を竦め、「ジョンさんこそ、毛深くって大変なんじゃないですか？」

クーゲルシュライバーの問いへ、ジョンは何でも無い様に、いとも簡単に「ああ、風呂に入る時は人間形態になってるから」と答えた。

「……ふざけないで欲しいですね。駄犬さん、人間形態は甘えとか言ってたでしょう」

「……面倒には勝てませんでした」

ナザリック地下大墳墓において恐怖の極限として恐れられる強大なる邪神の怒りに、

人狼はそつと眼を逸らした。

「サファイアスライム、良かったですよ」

ヘタレを告白した人狼ジョンと怒れる邪神クイゲルシユライバーの仲裁に入ったのは、やはり至高の41人のまとめ役であるモモンガだった。

「スライム。成る程、そう言う手段がありましたか」

モモンガの言葉にクーゲルシユライバーは感心し、駄犬ジョンは「スライムに陵辱される骨とか誰得？」と言いながら、ごくりと唾を飲み込んだ。

駄犬ジョンの脳内劇場では、NPCの誰かがスライム風呂に入浴している姿が再生されているようだった（お見せ出来ません）。

「何を想像してるのかな？」

「こいつさかりやがったぞ」

「んなわけないだろ」

駄犬を見る二人の冷め切った視線を即座に否定するジョンだったが、クーゲルシユライバーは彼に無慈悲な言葉をぶつける。

「なら、立って見て下さいよ」

なんとと言う無慈悲な一言。男には立たねばならぬ時でも、立てぬ時があると言うのに。

この男は邪神と成り果て、人の心を忘れてしまったと言うのだろうか。だが、ジョンはニヤリと牙をむき出して笑う。

「ふ、見てろ」

何も問題はないと、ジョンは椅子から立ち上がって見せた。

「……たつたのに、たつてない——だと」

そんな馬鹿な。

クーゲルシュライバーの愕然とした声に、「モンクは精神鍛錬も積んでいるのさ」と、胸を張って良い気になるヘタレの駄犬。

モンクかあ。セバスは王都で女を拾って来たつけなあ。冷めた眼でジョンを見ているモモンガ。

種を明かすと、スキル《コツカケ》の使用だった。

肉体操作により内臓の位置すら変えて急所攻撃クリティカルを防ぐ肉体制御技法。これにより見苦しいものを完全に体内に格納し、無駄に戦闘形態バトルスタイルを取っていた人狼ジョンだった。しかし。

「——駄犬さん、とうとう去勢されましたか？」

黒髪黒眼のイケメンになっているモモンガの一言が、そんなジョンの精神にクリティ

カルヒツトした。

人狼の顔を大きく歪め、顔の横に『?!』を出しながら、「んだと骸骨」モモンガの額をぐりぐりと押し付けけるようにメンチを切る。

人化しても精神作用無効が働いているモモンガは、まったく怯まず、寧ろ楽しげに返した。

「ふ、即死耐性貫通持ちに喧嘩を売るとは良い度胸です。NPC達がナザリック最強の支配者と呼ぶ存在。その真の力を見せてやろう」

「性能だけに頼る前衛職と一緒にされては困るなあ。モモンガさんを12秒以内に骨粉にすれば俺の勝ちだよな？」

開幕即死貫通攻撃をされると、補給の効かなくなった課金アイテムを使わない限り、ジョンではどう頑張っても相打ちにしかならないのだが。

「舐めるなよ。俺の肉体武装（爪）はコキュートスと違って神器級ゴッズに届くぞ」そう精一杯強がる。

「え？ 肉体武装って、本当にそこまで性能上がったんですか？」

肉体武装には余り縁がなかったので、ジョンの発言に俄然興味を惹かれるモモンガ。

その様子に珍しく自分がモモンガに教えられる事があつたと、ジョンは先程までのやり取りを忘れ、得意気に語り出した。

「爪の性能が格闘戦全般に適用されたから頑張りましたよ。手足の爪を全部使ってスキル併用して漸くだから、重課金者の廃人じゃないと無理です」

ジョンの得意げな語りにゲーム時代を思い出したのか、同じく前衛であったクーゲルシュライバーは納得したような声をあげた。

「ああ、それで『地上の如何なる名刀にも勝る余の腕が』とか『聖剣抜刀』とか言ってたんだ」

「でも、それって……性能だけに頼るそこらの前衛職より性能が高いですよね？」

モモンガに痛いところを突かれ、再び話を逸らすジョン。

「……それは兎も角、決め顔で眼を光らせるのはズルイよ。モモンガさんかつけー」

「あんた、スーパー化あるだろ」

「やれやれ」

話が飛び飛びだ。実はこいつら酔ってるんじゃないだろうか？

疑いながら蜂蜜酒を飲むクーゲルシュライバーだったが。

「クーゲルさんの飲み方って、股間<sup>ア</sup>で飲んでるように見えるよね」

人間状の上半身と蜘蛛の頭部の接合部、蜘蛛本来の口から蜂蜜酒<sup>ド</sup>を飲む姿は確かにそ

う見えるだろう。見えるだろうが……。

びっしいいッ、とジョンの無造作な一言に店内の空気が凍った。

「ふ、ふふふ。駄犬、現実となった神話パワーを見せてやる。100や200では済まさんぞ」

「え？」

ジョンには、漫画的なゴゴゴと言った音が実際に聞こえるような勢いで、クーゲルシュライバーの気配、戦闘力が上昇していくのが感じられた。

それがスキル《恐怖を喰らうもの》の効果である事は理解していたが、自分の知っているそれとは明らかに違う。上昇し続ける力に、汗腺が殆ど無い筈の身体に冷や汗が流れるのを止められなかった。

「許さんぞ。この駄犬。2千を超える神話パワーで、じわじわと弄り殺しに（5分間で）してくれるわ」

「え？ なにそのインフレ」

100神話パワーでも力負けするんですけど？

……なんとと言う、圧倒的<sup>性</sup>神話<sup>能</sup>力。

／＊／

——時折、決して交わらぬ世界と世界を繋ぐ、不思議な扉が現れることがある。  
——その扉を潜った先では、決して出会わぬ筈の至高の御方々が杯を交わす。  
——不思議な、一夜限りの夢があるらしい。

## 第21話＋1。パラレル時空：ぷれあです定例報告会

これはパラレル時空でフィクションWです。本編および他所様の作品、ストーリーには一切関係ありません。

以上をご了承の上、お楽しみ下さい。

／＊／

「ゴールデンアツサムの良い香りが漂う中、プレアデス定例報告会（お茶会）が始まりました。」

「今回のお茶の当番はユリ・アルファ。次回はルプスレギナだ。」

「ユリ姉。次つすけど、珈琲でも良いっすか？」

珈琲はメイド達は余り好まない。好んで飲むのは至高の御方々でも一部であったので、不思議に思ったユリが「どうしてかしら」と問うと案の定と言うべきか、ルプスレギナは健康的な褐色の肌を微かに染めながら、返答を返した。

「ジョン様は苦味のあるお茶を好まれるようなので……」

その言葉に「あー」と、納得と呆れと僅かな嫉妬が入り混じった表情と声で、妹達（ナー

ベラル、ソリュシャン、シズ）は口々に驚きと至高の御方への賛辞を口した。

「ルプーが自分から仕事の練習をしたい……だなんて」

「流石は至高の御方。私達に出来なかった事を平然と実現させる」

「そこに痺れる。憧れる」

「なにさー！ ナーちゃんも、ソーちゃんも、シズちゃんまでえー！」

ルプスレギナは赤毛の三つ編みを揺らしながら、ぶんぶんと手を振って妹達へ抗議する。

「こつちよりは軽症」

そう言ったシズの視線の先では、エントマが卓に突つ伏したまま苦しそうに身悶えている。

顔は仮面蟲の為、表情は変わらないが、口唇蟲は時折役目を忘れ、シニヨン髪に擬態している蟲の一匹も擬態を忘れて大暴れしていた。時折、本来の口の辺りから、ぴやあああああと言う虫の嘶きのような声も聞こえてくる。

「どうしてえ、こんなにいい、こんなに幸せなのお？ 頭の中あ、とろけちゃうよお……！」

「つて、うわあ。エンちゃん、すげえつす。アバ・ドン様と何があつたつすか？」

流石にルプスレギナも平静を取り戻し、「なんかもう、ゴールしちゃった見たいつすよ」と、以前よりも確実に重症化しているエントマの様子に冷や汗を流した。

やっぱり、百戦錬磨のイケ蟲に美味しく頂かれてしまったのだろうか。それは一寸ばかり羨ましい。

「ずつとこの調子だから、何があつたかはボク達も分らないよ。それよりも、ルプーはちゃんと任務は出来てるのかい？」

「勿論つすよ、ユリ姉！ 敬愛するアインズ様と、愛するジョン様の為にちよー見てるつすよ、カルネ村を。穴が空くほど！ あいつ等ゴブリンの夜の営みまで事細かに」

「ルプー、それは見るところじゃない」

頬を染めながら、くふふふと笑うルプスレギナへナーベラルから冷めた突っ込みが入るも、ルプスレギナは妹へそんな事は無い。これは必要な事なのだと言葉を握って力説した。

「ナーちゃん。そんな事言うけど、しっかりと見ておかないとジョン様が…おもつお求めになられた時にかっかりさせてしまったら、どうするつす？ そんなの耐えられないつすよっ。」

「一理ある」

「シズまで！」

「それでユリ姉え。私、ジョン様に髪を解いている姿も可愛いなって言つて頂けたつす」

「それは良かったわ、ね……？」

「ルプー、至高の御方の前で頂いた姿を崩したの？」

至高の御方に頂いた姿を許可無く崩すなど許されない。ナーベラルの視線に剣呑な光が籠るが、対するルプスレギナは不思議そうに首を傾げる。

「？ ナーちゃん、違うっすよ。夜、私の部屋までジョン様が来られたっすよ」

いやーノック3回だから、てつきりユリ姉か、ナーちゃんかと思つてドアを開けたら、目の前にジョン様が。本当にびっくりしたっすよ、とルプスレギナは続けているが、姉妹達はそれどころではなかった。姉妹達はルプスレギナが髪を解くのが夜眠る前の少しの間と知っている。そこに至高の御方が訪ねてきて、髪を褒めて……褒められるのは嬉しいし、羨ましいが……まさかそのまままで済む訳が無かった。第九階層と違つて使用人の目も無く、二人つきりで一つ屋根の下。これは……。

ユリ、ナーベラル、ソリュシャン、シズは頬をほんのりと染めながら、顔を見合わせる。

不敬故に余り想像すべき内容ではないのだが、4人はそれ以上、踏み込んで聞くべきか？ ならば、誰が踏み込むべきかを視線で牽制し合う。

非常に聞きたい内容なのだが、至高の御方の私的な内容だけに自分から踏み込むのは躊躇われる。今ほど守護者統括様ドがここにいればと願つた事は無い。

「私もお、アバ・ドン様から私を専属にい出来た事お、心から幸せに思っていますつてえお言葉を頂いちゃったのお」

そこヘルプスレギナの声に反応したエントマが自分も自分もと、自分の受けた寵を自慢し始めて、自体は更に混迷を深める。

ガタツと椅子を蹴立てて、ルプスレギナも立ち上がり、大人気なくも妹と張り合い出した。

「わ、私だってジョン様に『お前の気持ち——美味かったぞ』って言って頂いたつすよ！」

「気持ちが美味かった？ 意味深な言葉ね」

「ユリ姉様、気持ちが良く上手かったでは？」

ひそひそと声を潜めて、ユリとソリュシャンが赤い顔で言葉の意味を探る。

これがR18的な意味に聞こえる人は心が汚れています。ぶーくの心は汚れています。  
が。

「アバ・ドン様あ。ああ、お尻い……！」（注：おんぶで支えた時の回想です）

重ねて言いますが、R18的な意味に聞こえる人は心が汚れています。ぶーくには聞

「こえましたが。」

「ぴやあああああと言う虫の嘶きのような声と共に聞こえたエントマの言葉に今度こそ姉妹達はぎよつとする。」

「お、お尻!」

「そんな!?! シャルティア様ではあるまいし!」

「待つて! シャルティア様はペロロンチーノ様に、ペロロンチーノ様の理想の女性として、至高の御方の伴侶<sup>嫁</sup>として創造されたとカルバイン様が晩餐会で仰っていたわよね」

動揺するユリとナーベラルへ、姉妹で最も露出度の高い衣装を至高の御方より賜ったソリュシヤンが落ち着くと、デミウルゴスのような迷推理に繋がるであろう状況の確認を始めた。間違いなくソリュシヤンも動揺していたし、アンデッドで精神作用効果無効がある筈のユリまで動揺させる至高の御方の影響力の偉大さよ。

「え、ええ」

「そして、ペロロンチーノ様はアルベド様が創造される時に至高の御方々の嗜好……特に<sup>エロ</sup>と<sup>フェチ</sup>の方面を調査し、取りまとめ、アインズ様のお好みを纏め上げた御方」

「つまり?」

「ペロロンチーノ様のご趣味は至高の御方々のご趣味の集大成であつて、至高の御方々

の嗜好そのものから外れてない、とすれば……!」

「一理ある」

黙って最後まで話を聞いていたシズの言葉に視線が集中し……ユリ、ナーベラル、ソリュシヤン、シズは赤い顔を見合わせて頷いた。

「アルベド様にご相談するべきかしら?」

「絶対、暴走する」

「暴走されるにしても、ご相談しないわけには行かないわ」

「それではデミウルゴス様にも相談しておきましょう」

姉妹達が今後の行動方針を決めている間も、エントマとルプスレギナの寵愛自慢は続いていった。

「ジョン様と夜のお散歩に行ってきたつすよ。《サイレンス／静寂》を使うよういわれたつすけど、ジョン様が凄くて魔法なんか吹き飛んでしまったつす」

「私もお、アバ・ドン様の騎蟲に同乗させて頂いてえ、逞しいお背中にいしつかり掴まらせて頂いてしまったのお」

「エンちゃん、やるつすね。負けないつすよ。私もジョン様に跨がせて頂いて、夜の森……」

二人とも全てが終わった後に自分達は何を言っていたのかと、赤面しながら卓に突っ伏

す事になるのだが、何時ぞやのアインズとアバ・ドンも闘技場でカツコつけすぎて円卓で頭を抱え突っ伏した事を考えると、直接での創造主と被造物でなくとも、アインズ・ウール・ゴウンとナザリックのものは何処か似た所があるのだろう。調子に乗るところとか。

「なっ、夜の森で至高の御方に…跨る？…：…ペスとセバス様にもご報告して置かなくては」

「アルベド様、大丈夫かしら」

「アインズ様の警護を強化するよう、コキユートス様へもご相談するべきね」

「……」

そして、別に優れた頭脳がなくとも、僅かな情報から悪意なく至高の御方を追い詰めていく迷推理も、ナザリック魂と言う物だろう。

## 第22話＋1。パラレル時空：ゲヘナ打ち上げ会

これはパラレル時空でフィクションWです。本編および他所様の作品、ストーリーには一切関係ありません。

以上をご了承の上、お楽しみ下さい。

／＊／

ナザリック地下大墳墓第九階層。ロイヤルスイート。

キノコ頭の副料理長のシヨットバーをイメージした部屋は、落ち着いた照明が室内を照らし、酒を並べた棚にカウンター。椅子の数は僅かに八つ。

常連と呼べる者は片手で数えられる程度だったが、まれに至高の御方々が訪れる事もあった。

そんな夜は、決まって朝を迎えて考え込むのだ。

はて、自分の仕えるナザリック地下大墳墓にお残りになられた至高の御方は、お一人だったか？ それとも……お二人だったか？ と。

「かんぱーい」

今宵も至高の御方のまとめ役であるアインズ・ウール・ゴウン……至高の御方々の間では以前と同様にモモンガ……が、魔法で黒髪黒眼の青年の姿で来店し、彼を挟んだ左右には青い毛並みの人狼と、ひらひらした法衣を着た中性的な美少女ぐりもあが座り、今モモンガ越しに軽くグラスをぶつけ合った。

「いやー良い出来だったね」

「本当だねえ。モモンガさんも頑張ったし……なかなかの逸材厨二病も見つけたし」

「……鬱だ、死のう」

ウキウキとした様子で語り合う二人の間で、モモンガは頭を抱えてカウンターに突っ伏していた。

立ち直ってこないモモンガにぐりもあとジョンは顔を見合わせるが、余り深刻に受けて止めていない様子で、左右からモモンガの肩に手を乗せて励ました。

「モモンガさーん、アンデッドでしょう？ もう死んでるよー」

「完全なる狂騒、使います?」

あれだけの事をして、全然まったく気にしていない二人へ、モモンガは恨めしげに問いかける。

「どうして、お二人は平気なんですか?」

「どうして?」

「たつちさんは素でやってたでしょう?」

モモンガの苦悩が理解できず不思議そうに首を捻る二人は、モモンガの行動がたつち・みーに似ていたと言う。

そう言われれば悪い気はしないが、たつち・みーはそんな行動を本当にやっていただけだろうか?

「たつちさんと重ねて見て下さいね。はい、動画再生」

ぐりもあはアルベドを幼くしたようなその顔に仕方ないなあと言った表情を浮かべ、動画スクロールをインベントリから取り出す。

そして、店内で動画スクロールの再生が開始された。

／＊／

ガガーランが倒れ、ティアも倒れ、仮面も砕かれ、半死半生のイビルアイ合法ロリ。

彼女は自らの長い生の中でも出会った事の無い強者に震えながら、それでも叫ぶ事を止められなかった。

「貴様は……貴様は、一体何者なんだっ!？」

眼前の魔神級を超える圧倒的な力を持つ、謎の緑の人狼へ叫ぶ。

「俺が何者か、だつて?」

ウルツフルルルと特徴的な笑い声で嘲笑しながら、その謎の緑の人狼はイビルアイに答える。

「王国の悪政により、苦しみ死んで逝った人間どもの悲鳴と呪詛と絶望から俺は生まれた。俺は弱者を踏み躪る世界全てを踏み躪る。復讐の狼、ウルツフル!」

「人間の悲鳴と呪詛と絶望から生まれた……だと」

星の光を束ねれば、いつか朝が来るように。

小さきものの悲鳴と呪詛と絶望を束ねれば、いつか世界は闇に染まるのだ! と、続けるウルツフルジュンの言葉を呆然と繰り返すイビルアイ。

そのイビルアイの前で、セリフと共にパンドラス・アクターのような大仰な動作で大見得を切るウルツフルジュンだった。

モモンガ@上空を通過中(うわーだっさいわー)

「さあ、始めよう。力を持ちながら安穩と生きるもの。過去が貴様に追いつく時が来た。聞こえるだろう——過去からの亡者の呼び声が」

ウルツフルジュヨの手にある魔導書ぐりもあのページが独りでに捲れ、黒い風イを纏タった巨人クアが複数現れ、黒い風は亡者のように気味の悪い音で唸り始める。

（お、正気を保った吸血口リだから、過去になんかあったと思っただけど、ヒットしたっほいですね）

デバフによる神話的恐怖で幼児退行を起こしかけ、ウルツフルジュヨの威圧による重圧で身動きも出来なくなったイビルアイは、弱々しく首を左右にふり始める。

「い、嫌だ…違う、私は…嫌、やだ…やだ、やだ……」

過去を封じた記憶のフタは叩き壊され、忘れたい過去が溢れ出す。蘇る恐怖と罪悪感が彼女の精神を打ちのめし、イビル合法アイロリの生命が刈り取られようとしたその瞬間とき、雷のような轟音と共に彼らの間の石畳が砕け散り、土埃が舞い上がる。もうもうと上がる土ぼこりは黒い風に吹き飛ばされ、月明かりが差し込んだ。

そこにいたのは漆黒の戦士。

月の光に輝く漆黒の全身鎧。金の縁取りがぎらりと輝き、炎のように真紅のマントが風にたなびく。手には見事な造りの巨大な剣が一本ずつ握られ、溢れ出す強大な力を纏っているかのようだ。

石畳を砕きながら、着地の姿勢からゆっくりと身を起こした漆黒の戦士は、御伽噺の英雄のように見えた。

誰もが息を飲む中、背後に震える少女を庇い、漆黒の戦士は巨大な剣をウルツフルへ突きつける。

「私の敵は、お前かな？」

それは誰もが想い願う英雄の姿。強きを挫き、弱きを助ける御伽噺の中の英雄の姿だった。

／＊／

「あの後のやりとりも良かったよね。『私の経験則だよ。善き行いを好む者は少数を好み、悪しき行いを好む者は徒党を組む』」

「あああ」

「『吸血鬼？ それがどうした。多数を持って少女を騙るものよ。私は貴様を許さない』」

「やめて！俺のライフはもうゼロよッ!」

魔導書ぐりもあと人狼ジョンの賞賛の声に再びカウンターに突っ伏すモモンガ。

「あれであのロリ吸血鬼のハートはがちりキャッチだね!」

「登場して一瞬で観客のハートをキャッチ! 中々出来る事じゃないよ。流石はモモンガさん!」

止めてくれ、二人とも。俺のライフはもうゼロだつて言ってるだろ。

「でもさ。たっちさんなら、演技じゃなく素で同じような事を言つた筈だよ!」

「そーそー、それだけ恥ずかしい事を自然体で言えるから、皆が自分に出来ない事をやれる人だつて憧れるんだよ?」

魔導書ぐりもあと人狼ジョンのフオロー(?)に、びっくりと反応するモモンガ。

自分もこれだけ恥ずかしいのだ。たっち・みーも恥ずかしかったのだろうか? それでもそれを貫き通したのだろうか。

そう理解して見ると、たっち・みーの『当たり前』と言う行動が、どれだけ現実には難しいものなのかが良く理解わかる。

それをゲームの中でも実行し、貫き通した事は一つの偉業であろう。

それがどれだけ難しいものであるか、無意識にでも理解していたから、尚の事、輝いて見えたのだらう。

綺麗だったから憧れた。そんな風に自分もなれるなら、なつて見たいと憧れた。

「俺も……モモンを続ければ、何時かはたつちさんに追いつけるでしょうか？」

「勿論だよ」「勿論さ」

自分へ力強く頷いてくれる仲間の励ましに、思わず目頭が熱くなる。

左右から肩を叩く二人の手は頼もしく。共にある仲間がいる事に心は温かくなった。

《ぐりもあさん、これで何処でもヒーローショーが出来ますね》

《そうだね。あと蒼の薔薇のラキュース：彼女も良かったね。教材とか碌に無いこの世

界で、良くもあれだけ（厨二病を）拗らせたなつて感心するよ》

魔導書ぐりもあと人狼ジョン……二人はモモンガから見えない側で悪い笑みを浮かべていた。

けれど、モモンガへの悪意は無いので良しとして貰えないだろうか。

この動画【漆黒の戦士モモン】シリーズは、その後、第九階層のシネマズ・ナザリツクに収められ、シモベ達を大いに楽しませる事になるのだが、それはまた別の話。

——時折、決して交わらぬ世界と世界を繋ぐ、不思議な扉が現れることがある。

——その扉を潜った先では、決して出会わぬ筈の至高の御方々が杯を交わす。

——不思議な、一夜限りの夢があるらしい。

## 第29話+1：パラレル：ゆく年くる年

これはパラレル時空でフィクションWです。本編および他所様の作品、ストーリーには一切関係ありません。

以上をご了承の上、お楽しみ下さい。

／＊／

ナザリツク時間で12月も終わりとなった深夜0時、地響きを立ててカルネーダーシュ村から走り出す山のように巨大な狼の姿があった。

それは世界級アイテムの力で持つて体長200mを超える大きさとなったジョンによる王国、帝国、法国巡回マラソンの始まりだ。

この世界に転移して初めての大晦日。ジョンは大晦日なのだから、何か特別なイベントがやりたいと無い知恵を絞って考えた。

大晦日だからナザリツク歌合戦とかどうだろうか？ 参加者、楽師とジョンぐらいか

? 少なすぎる。皆が楽しくないから却下。

コキュートスとプロレス。訓練と何が違うとモモンガから突っ込みが。

結果、チーム時王の元ネタとなった21世紀のアイドルグループのリーダーが24時間マラソンを（夏に）やっていたのを思い出し、ジョンが巨大化して24時間で王国帝 国法国を巡回し、縄張りを主張しつつ、31日終わりぎりぎりにゴール。楽師と時王の演奏でモモンガが〇〇イを熱唱しつつ、縄張りを見回ってきたジョンを迎え、新年を迎えると言う十代の暴走のようなイベントにまとまった。

ジョンを送り出す松明の列、送り火に見送られながら巨大狼となったジョンが走り出し、速度を上げていく。

世界級アイテムで巨大化したジョンは巨大化しても速度が犠牲になる事がなかった。

同じ速度で戦う事が出来たのだ。物理的にはおかしいのだが、運営が言うところの「世界の可能性はそんな小さなものじゃない」と言う事なのだろう。

巨大化して手足が同じ速度で動くから、手足の末端速度は巨大になった分だけ速く なっている。

地球の動物でも短時間100km/hで走ったり、70km/hで長時間走ったりできるのだから、視界から消えるほどの速度で戦闘できる100Lv戦士系狼が巨大化し

たら300km/hで24時間走れても良いじゃない。

この世界の住人は高速で動いても属する物理法則が違うのか衝撃波が発生したりしないのだが、ジョンに限っては都合良く衝撃波が発生しているので全力で走ると大地が捲れ上がったたり、大地震で大災害となったりしそうなので、世界に配慮し、300km/hぐらいに自己規制している。

見送る村人達の列の中、波乱の一年で新たな村長となったエンリが隣に立つ赤髪の絶世の美女——ルプスレギナへ問う。

「ルプスレギナさんは一緒にいなくて良かったんですか？」

「魔法使っても、あんな速さで24時間は無理です。それに私は／新年を祝う儀式《新春隠し芸大会》の用意を頼まれてるっすからね」

「新年を祝う儀式ですか？」

「そうっすよ。ジョン様に悦んで頂くために身体を張って頑張るっすよー！  
残念美少女<sup>シャルティア</sup>さんは自分で首ちよんばしてデユラハンとかやるらしいっすねー」

「え？……首、え？」

ルプスレギナの身体を張ってに不健全な想像して赤面するエンリだったが、続く斬首発言に青くなった。

この人達の冗談は分かり難い。

何かの暗喩だろうとは思うのだけれど、やっと簡単な読み書きと二桁の計算が出来るようになってきたばかりの自分にはまだまだ難しい。後でンフィーに何の例えか聞いてみようと思う。

時に恐ろしく、けれど優しいこの人たちが、それでも自分達と同じように家族や仲間達と新年を祝う事が、エンリには嬉しかった。

「今年はルプスレギナさんとお友達になれて良かったです。来年もきつと良い事があるよう頑張ります！」

「エーンちゃん？　今年はご両親が殺されて、村も襲われて酷い年だったんじゃないっすか？」

「はい。でも、カルバイン様を見てて思ったんです。酷い事を思い出して泣いているより、良かった事を思って頑張ろうって」

「……そうね。そうだね」

何かを思い出し、胸に手を当てる回想に浸るルプスレギナを覗き込む様に見上げながら、エンリは自分を友人と呼んでくれる今年出会った新たな友人へ、自分も赤面しながら悪戯っぽく笑いかけた。

「その顔はカルバイン様と結ばれた日を思い出ししてる顔ですか？」

「そ、そうっすよ！　そう言うエンちゃんはどうかんすか！」

「えーと、私は……まだ、その……」

来年も再来年も、こうして過すごししながら、村人も家族も増えていくと良いな。

予想されたルプスレギナの反撃に赤面しながら、エンリは感謝の祈りをアインズ・ウール・ゴウンへ捧げていた。

## 第29話＋2：パラレル：ゆく年くる年2

これはパラレル時空でフィクションWです。本編および他所様の作品、ストーリーには一切関係ありません。

以上をご了承の上、お楽しみ下さい。

／＊／

とつぷりと夜も更けたカルネーダーシユ村では守護神獣を迎える篝火が赤々と燃えあがっていた。

エンリ達、村人達の基準では日が沈んだら1日は終わりだが、村を救ってくれたカルバイン達にとって1日とは深夜に変わるものらしい。

星か月か、何を基準にしているのか村人達には分からなかったが、自分達より遥かにものを知っていて惜しみなく知恵を授けてくれる彼等がそうなのだから、自分達には知らない何かがあるのだろう。

彼等の1日の終わり、1年の終わりを目前に控える中、遠くから地響きの音と振動が

村へ近づいてくる。

今日の始まりに駆け出していったカルバインが王国、帝国、法国を巡り戻って来る足音だろう。

1日で村人達にとって遙か遠い世界を駆け巡って戻って来るなど、まさに神話の世界の出来事だ。

そして、彼を迎える列もまた神話の再現のようだった。

生と死の神アインズ・ウール・ゴウンに、それに仕える御使いの列。

その後ろに控えるカルバインと同じ人狼の時王達が見た事もない楽器で演奏を始めると、生と死の神アインズ・ウール・ゴウンがカルバインを迎える歌を歌いだした。

それは夢を捨てられず、故郷を離れ、それでも故郷を捨てられずに何時の日にか愛する故郷へ帰る流離人の歌だった。

歌が巡り、2週目に入ると神の側に仕える白いドレスの翼ある女性が一緒に歌いだす。それに続いて次々と異形の御使い達も歌いだしていく光景はまさに神話の光景だ。

3週目に入ると、事前に歌を教えられていた村人達と漆黒の剣、ブレインやクレマンティーヌ達も歌に加わる。

その他、法国から儀式に参加しているクアイエッセ・ハゼイア・クインティアは奇跡の光景に感動の余り号泣しながら歌っている。

村を王国の領土ではなく法国の奉じる神の領域と認めてくれた神官長ニグンの代理として、村に派遣されたクアイエツセだったが、カルバイン達のシモベとなったクレマントリーヌの生き別れの兄だったようで、その再会で一悶着があった。今回は重要ではないので省略する。

その感動の大安売り会場へ息を切らせて戻ってきた守護神獣カルバインは人狼の姿に戻ると、生と死の神アインズ・ウール・ゴウンに人類領域を無事に巡回してきた報告を行う。支配者に相応しい威厳を持ってカルバインを迎えた神は、村人達へ祝福の言葉をかけると御使いとカルバインを伴って、アゼルリシア山脈にある彼等の神域へ、人類では及ばない高位魔法を持って移動していく。

ここからはヒトはヒト。神は神で新年を祝う時間となる。

村人達は時王の指導の下、僅かではあるが自分達で用意できた食材も惜しげなく使って、新年と自分達の幸運、神への感謝の宴を始めるのであった。

／＊／

アゼルリシア山脈の中腹に転移直後からアウラが建設を命じられ、建築を続けてきた偽装ナザリックも半年以上の時間が経って内装はまだ至高の御方に相応しくなくとも

外見は相応しいだけの威容を見せられるようになってきていた。

その前庭には巨大な魔法陣が描かれ、モモンガはシモベ達に魔法陣の説明を行っていた。

「……我々が世界間を行き来出来なくなつた事は守護者達へ語つた通りだ。だが、それはあちら側がこちらと断絶しているに過ぎない。こちらから私自身を鍵、縁として召喚を行うならば接触できる可能性はある。特に1日の変わり目、1年の変わり目は世界間の境界が緩み、啓示や召喚を行いやすくなるとダブラさんも語っていた。そこで私達はこの機会にジョンさんの走行軌跡を魔法陣に見立てた巨大な召喚陣を用意する事で……」

「……モモンガさん、そろそろ始めないと……説明長いよー」

目をキラキラさせてモモンガの説明に聞き惚れるシモベ達と違い、何度も説明を聞きながら、一緒に計画を立てたジョンはモモンガの語りに食傷気味だった。耳と尻尾を情けなく垂らしながら、時間が迫っているとモモンガへ告げる。

それに気がつくよりも、時間が迫っている事に気がついたモモンガは説明を打ち切り、配置につく。

年の変わり目。年を飛び越える瞬間に向かつて、モモンガは目の前の巨大な魔法陣を起動させ、魔力を注ぎ込みながら詠唱を始めた。

眼前の魔法陣と連動した人類領域見回りと称したジョンの軌跡も地脈の靈気を吸い上げ、大小2つの魔法陣が共鳴しながら遙か彼方の世界へと接続する為の銀の道への扉をこじ開けようと起動し、明滅し始める。

歌うような詠唱と魔法陣の明滅、脈動が最高潮に達した時、光が爆発的に膨らみ弾け、一時であるが真昼のように夜を明るく照らした。

この現象はジョンが走った後、全てで起こっており、神の奇跡として人々の心に様々な影響を与えていく事になるが、今、大森林の住人達が滅びの建物と呼ぶ存在に集う者達の目の前には、彼らをして信じられない光景が広がっていた。

爆発的な明かりが去り、星明かりのように微かに魔法陣が光る中、その中央には魔法による発光を伴った華美な装飾の施された鎧で全身を包んだ戦士風の鳥人がいたのだ。

「……モモンガさん？ ああ、夢でもまた会えて嬉しいですよ。姉ちゃんが羨ましがらうなあ」

視線を異形の者達の上を彷徨させた後、モモンガに視線を固定した爆撃の翼王は夢現の口調でそう言った。

その姿に赤い瞳を潤ませるシャルティアの背中を、ジョンは了承の意味を込めて軽く叩いてやった。

「ペロロンチーノ様ああッ!!」

黒いボールガウンにメガ盛りの偽乳。普段は偽乳が動かぬよう決して走る事の無い彼女が、パッドがどつかへ行く事も顧みず、砲弾のような勢いでペロロンチーノへ突撃する。

身長差があるので首に飛びつくようしがみ付くシャルティアの突撃は、状況を理解していないペロロンチーノに不意打ちに近いものだったが、飛行能力を自前で持ち、抜群のバランス感覚を持つガチ勢の彼の身体は巧みに衝撃を殺し、バランスをとって、シャルティアを抱えさせた。

「え？ シャ、シャルティアか!？」

「はい！ ペロロンチーノ様の嫁！ シャルティアでありんす!!」

涙に塗れた表情に精一杯の笑顔を浮かべて答えるシャルティアにペロロンチーノ理性が決壊した。

無理も無い。男子であつたら、自分の理想が動き出し、自分を慕う姿に理性を保てる

だろうか？

「夢でもありがとう！ モモンガさんありがとう！ ジョンもついでにありがとう！  
皆、ありがとう！」

ペロロンチーノは現実の厳しさも忘れ、今は一時、この夢に溺れても良いかと夢に感謝しながらシャルティアの首筋に顔を埋め、彼女を支える両腕を忙しく動かし始める。

その動きにぎよつとしたジョンが叫ぶ。

「俺ついでかよ！ ペロさんにとつては夢でも、俺たちには現実なんだよ！ やるならせめて部屋に行つてくれよ！ 最初から公開羞恥ぶれいとかシャルティアどんだけ上級者なんだよ!!」

「わ、妾はペロロンチーノ様がお望みになるなら、どんなぶれいでも……」

ペロロンチーノの腕の中で顔を赤らめながら見上げるシャルティアの表情は、勿論、ペロロンチーノの理想の通りで彼の理性は白旗を上げっぱなしだ。

「ヤバっ！ なんて可愛いんだ！ シャルティア！ 流星は俺の嫁!!」

「はい！ 私はペロロンチーノ様の嫁でありんす!!」

俺の嫁を恥じる事無く連呼するペロロンチーノ。

それに喜びの表情を浮かべるシャルティアへ羨ましげな表情を向けるアルベドとルプスレギナ。

二人とも、この時ばかりはペロロンチーノの方が、モモンガとジョンより優れていると豪語するシャルティアの評価を認めてしまいそうだった。

そんな男として不名誉な評価を下されそうになっている事にも気がつかず、ジョンは諦めたようにペロロンチーノへ声をかけ、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンをペロロンチーノへ投げ渡していた。

「……向こうで俺たちどうなってるのか聞こうと思つてたけど、もう良いや。時間までシャルティアを可愛がつて下さい。また召喚しますから」

今だここを夢だと思つているペロロンチーノがリングを受け取り、転移していったのを見送つて、ジョンはモモンガに向き直る。

「召喚はどうでしたか、モモンガさん？」

「魔法陣の感じからすると90分ぐらいですかね。私達と違つて異形種の身体を持つてこの世界に来たのではなくて、世界のデータベース(?)からデータを引き出して魔力で構築しているような状態だから……触媒とか、何か考えないと駄目でしょうね」

「……一応、メッセで時間制限あるって教えといた方が良いかあ。来年は誰呼ぼうか？  
茶釜さん？」

げんなりした様子でペロロンチーノへメッセを送るジョンを見ながら、モモンガは取り合えず成功した召喚魔法についての考えを口にした。

「改良して一度に呼べる人数を増やしたいですね。あと大晦日じゃなくても使えるように改良して、最終的にはこっちに移住できるような選択肢をつくってやりたいです……冒険者やらなくも良かったかなあ。こっちの研究に専念したいですね。でも、ジョンさんがいてくれたおかげで、超々巨大魔方阵を書く事も出来ました。ありがとうございます」

終わりを恐れながら、ゲームを続けていた昨年より今年は目標のある良い年になりそうです。

そう言ったモモンガの鬍髯が確かに笑顔であるとジョンには感じられた。

## ジロリアン、フレーパーティー

／＊／ ジロリアン

「で……どうして、あんな事をしていたのか。説明して貰えますね？」

そう言ったナザリック大地下墳墓の支配者たるモモンガの前には、駄犬バカップルたる二人の人狼の姿があった。

ジョンはいつもの人狼形態。ルプスレギナは戦闘メイド姿であったが、何故か涙で金色の瞳を涙で潤ませ、細い指で鼻をつまんでいた。

「ああ、それは俺が料理長のところで一つの料理を頼んだところまで遡る……」

ジョンは重々しく語り出した。

／＊／

それはラーメンでありながらラーメンではない。二郎という名の固有名詞を持つ食べ物。

「料理長！もつとこう山盛りに盛ってくれ。そして薬味はエツジの効いた感じに効かせて欲しい。見てくれももつと悪く！こいつはブタのエサか！って感じだ！」

ジョンのリクエストに料理長は頬を引き攣らせたかもしれない。幾らリクエストと

は言え、至高の御方にブタのエサなど出せるわけもない。だが、それでもそれをお望みなのだ。

太めの麺をカタメで茹でる。茹でると言うよりも潜らせたと言った方が良いかもしれない。バキボキをお望みだ。

常人ならば片手で持てないような井ぶりに麺を野菜を肉を盛り付けて……いや、山積みにしていく。

ブタの背油もナザリツクにある最高級のブタではなく、わざわざこの為にデミウルゴス牧場から仕入れてきたB級いやC級品だ。それを胸やけがするほどたっぷりと掛け、醤油ダレもグレードを出来るだけ落として背油に合わせて作ったものを注ぐ。

ただニンニクの辛味がどうしても至高の御方を満足させるには足りない！

もう一工夫……なにか良いアイデアはないものか。悩む料理長へジョンは青い花を付けた植物を手渡した。

「料理長、これを使ってくれ。これなら俺の味覚にガツンと来る筈だ」

「カルバイン様……おお！これは!?なるほど、これならば……」

料理長は納得すると植物の根をすりおろし、ニンニクのすりおろしに混ぜていく。これの味見ばかりは自分でするわけには行かず、ジョンに味見をして貰う。料理長の想定よりも、その根のすりおろしは少々多めに投入され、二郎という名のラーメンが完成し

た。

そびえたつ山のような丼にジョンは歓喜した。

再び、これを！このジャンクなフードを食べる日がこようとは！！

着丼したブツに歓喜し、無理な願いを聞いてくれた料理長のサービス精神に感謝し

……

「この全ての食材に感謝を！いただきます！」

ただ一心不乱に食らう。

ハムツハフハフ。ハフツ！！

口に広がる（ナザリツクにしては）グレードの低い醤油のエッジと、ニンニクの香り、スープのコツテリ脂感。

脳に突き抜けるガツンとした衝撃にも似た味覚への刺激。

野菜だけはナザリツク産の為、キャベツのシャキシャキ感と甘味がガツンと来る衝撃を柔らかく包み込んでくれる。

全てが望んだジャンク感ではないけれど、これはこれでありだなとジョンは思う。

「ふう、食った食った。ごちそうさん」

／＊／  
「話が繋がりませんね？」

「もうちよつとだけ続くんだ」

／＊／

薬味の刺激が足りなかったジョンは考えたのだ。

薬味とは摂り過ぎると調子を崩す事もある謂わば毒だと。

ならば、人狼にとって毒足り得るもの……それは、トリカブト。ウルフスベインだろう。

そう、この駄犬は自らの弱点属性である毒物の根をすりおろして、ニンニクに加えさせたのである。

毒物の刺激がぴりつとした辛味、苦味の刺激になるならば、これは最高の刺激になるだろうと。

思惑通り最高のジャンク感を楽しんだジョンであったが、問題はこの後である。

一仕事終えてジョンの傍らに戻ってきたルプスレギナであるが、すびすびと鼻を鳴らして一言。

「ジョン様？強烈に臭うんですけど、何食べたつすか？」

「ん？二郎だけど？」

はあああと息を吐いて、吐いた息を掌で受け止めて臭いを嗅いでみるジョンであったが、自分の臭いは分からないものである。

「んきや！臭いつす。てか、臭いを通りこして苦いつす！」

／＊／

「……で、ルプーが逃げ出したのが面白くて」

「ロイヤルスイートで追い掛けっこをしていたと……」

馬鹿だ馬鹿だと思っていたが……「好きな子に嫌がらせとか子供かよ」がつくりと肩を落とす死の支配者<sup>オバーロード</sup>。

「そんな事ばかりして、ルプスレギナに嫌われても知りませんよ」

「ガ——（；。口。）——ん！！ル、ルプー。その、すまん！」

がっつと、隣のルプスレギナへ流れるような土下座を決めるジョンだったが。

「ジョ、ジョン様がお望みであれば、私はなんでも受け入れるつすよ」

頬を染めたルプスレギナがいただけだった。

モモンガはいたたまれない。「え？」これ俺、駄犬<sup>バカッ</sup>プルのイチヤイチャの出汁にされた

だけ？

「ジョン様……」「ルプー……」「……くっさい息を吐かないで頂けますか？」

「え？」

予想外のルプスレギナの辛辣な言葉に時が止まった。  
「ル、ルプー。ご、ごめん。すまんかった……」

「はいっ。あーん★して下さいね。ジョン様、私と歯を磨きましょうねー」  
「ひゃ、ひゃい」

何処からともなく歯ブラシを取り出し、ジョンを膝枕して、ジョンの歯を磨きだすルプスレギナ。

もういいや。もうこいつら放って置いて部屋に帰ろう。

今日もモモンガの精神作用効果無効は絶好調であった。

／＊／ フレーバーティ

いつもの朝の執務室。人の（モモンガの）執務室まで来てから新聞代わりに報告書を読むジョンだった。

今日は珍しく甘い香りがするジャスミン茶を飲んでいるジョンに、モモンガはおやと

首を傾げた。

「珍しいですね」

「ああ、フレーザーパーティーは香りが強すぎて余り好みじゃないんだが、こいつは後味が良くてさ」

「ほう。ルプスレギナ、私にも貰えるかな」

ルプスレギナが逡巡したようだった。

その様子にモモンガは首を傾げる。

「どうかしたか？」

「ん？あ！そうか」

ジョンが何かに気が付いたと手を打ち合わせる。

「モモンガさん、口唇虫って毒無効だっけ？」

「は？」

「これカロライナジャスミン茶なんだ。人間くらいの毒耐性だと脈拍増加、呼吸麻痺、中枢神経刺激作用、血圧降下、心機能障害の症状がでるんだよ」

「おい。何飲んでんだよ」

「苦味はストレス解消にも良いんだぞ」

「イイ空気吸ってる奴が何言ってるやがる」

モモンガは呆れて肩をすくめると、報告書に視線を戻した。

## クルミ割り。牛フンケーキ。

／＊／ クルミ割り

村の食事と言えば石の様に硬いパンだが、これには理由がある。

燃料の確保が難しい為、なるべくまとめて焼いて保存が効くようにしているからだ。

一度に2週間分も焼けば、それはもう最後は石のように硬くなるだろう。

今となつては各家庭毎に第三位階魔法による結果があるので、暑さ寒さで燃料を必要としない。燃料を全て調理に回せる事で余裕が出来たとも言える。

また村外れのトブの大森林の畔に越してきたドライアード、ピニスン達が管理する森が出来た事から、豚の放牧をしつつ、マキを継続的に安全に確保が出来るようになった。

これによりパンを焼く回数を増やし、比較的軟らかいパンを食べられるようになったのだ。

「これを割れば良いつすね〜」

作業場になつている改築されたエモット家の食堂で、腰まで届きそうな3つ編みを2本垂らしている燃えるような赤毛の美女と人間形態のジョン（毛が入る事を嫌つて）が、村の女性衆に囲まれていた。

二人は大森林で見つけたオニグルミの一種をパキパキと握り潰している。本来は非常に硬く簡単には割れないが、100Lvと59Lvの二人にすれば卵を割るより簡単に割れる。

今回は大量にとれた胡桃をパン生地練りこんで焼くのだ。二人が手際よく割っていく胡桃を集めては、女性たちがローストし、カリツとしたところでパン生地練りこんでいく。

ルプスレギナも料理そのものは出来なくても、胡桃を割るだけならば出来るようだった。

「結構うまいな」

「ジョン様、つまみ食いつすか」

割った胡桃の欠片をつまみ食いするジョンヘルプスレギナは笑いかける。その頬に胡桃の欠片がついているのに気がついて、手を伸ばすと指でつまんで自身の口へ運ぶ。ナザリックのそれと比べると比べるまでもないものだが、愛する至高の御方の頬に付いていたものと思えば格別だ。

「お二人とも仲が良いんですね」

そんな二人へエンリが遠慮がちに声を掛ける。

「勿論つすよ。最愛の主人つすから」

「……臆面もなく言われると少し照れるな。俺もルプー以外は考えられないが」

ルプスレギナのあけすけな愛の告白に黄色い声上がり、作業場は今日も姦しい。

／＊／ 牛フンケーキ

ペテルたちが案内された広場では、女性や子供たちが異臭を放つ土を成形しているところだった。

現在のカルネーダーシユ村では襲撃で男手が減り、更に周辺の村からの移住者も襲撃で男手を失っている事から、ほぼ女子供の村と言っても過言ではない。

その為、女子供でも出来る仕事を時王たちが見繕ってくれているのだと言う。

「師匠！」

「よお、来たか！こいつを見てくれ」

女子供たちの中で異彩を放つ銀髪の大柄な男性が手を上げて、漆黒の剣を呼ぶ。

「……凄く、臭いです」

「これなんですか？臭いですけど……」

「牛フンケーキだ」

「……え”え”」

言葉の意味が認識されると思わず距離を取る漆黒の剣の面々。えんがつつちよである。「そう嫌がるなよ。良い燃料になるんだぜ」

完成品はこつちだ。とジョンは4人へ水分が抜けて重量が3分の1ほどまで減っている円形の土のような円盤を見せる。

エ・ランテルで糞尿は下水のスライムに食わせてるのを見て、思いついたんだとジョンは言う。

「完全に乾かせば臭いも気にならないだろう。これ一個で大体一晚燃えてくれる。冒険者の携帯燃料として使えないか？」

「……常にマキが手に入るとは限らないし、良いかもしれない。野伏でも常にマキが確保できるとは限らないからな」

最初に反応したのは野伏であるルクルットだった。やはり臭いが気になるのか、顔を近づけて臭いを嗅ぐルクルット。

「ん、こんぐらいなら、持つてても臭いで気付かれるのではないか、な」  
ルクルットやダインの反応に満足したのか一つ頷いて、ジョンは問う。

「1個銅貨3〜5枚くらいなら買うか？」

「そのぐらいなら買うぜ」

「そうか。なら冒険者組合に売り込みに行くぞ。銅貨1枚で卸しても、月にすれば4〜

5千枚ぐらいにはなるだろう」

具体的な金額を考えていた事に驚き、ペテルが思わず問う。

「売るんですか?」

「売る。貴重な現金収入だ。ロウソクも作ってるが、売れるものは多いに越した事はないからな」

答えながら、視線を巡らせたジョンにならつて周囲を見ると牛フンケーキを作っていた女性たちが手を休めて、ほっとしたような表情をしていた。

襲撃で夫を亡くし、村を亡くし、子供を抱えたままどうしようもなく後は身を売るしかなかった女性たちだ。最後の希望を掛けてカルネーダーシユ村へ移住してきた彼女たちにとって、売れると分った事はどれほどの安心だろう。これでもう村の好意に縋るだけではない。村の一員として真に生産活動に加われたのだ。

「……本当は自家消費して、灰をたい肥に混ぜたいところなんだけどな」

人糞だけでたい肥に足りるかなと呟くジョンへ、ペテルが声を掛ける。

「稽古はどうします?」

「その前に風呂だな。午後で作ってるのは、その為でもあるし」

「ああ、夕飯の前に清潔にしておくんですね」

「そういうことだ。……別にう〇こが好きなわけではないからな」

「……」

「なんだよ、その表情かおは？」

## 第9層寢室。 食堂7：14

ナザリツク地下大墳墓、第九階層（ロイヤルスイート）の一室。

天蓋付きの馬鹿でかい寝台。永続光を間接照明に使った柔らかい光。落ち着いた雰  
囲気だが、贅を凝らしたロイヤルスイートの内装。ここはギルドメンバーの居住区にあ  
る寢室であつた。

汚れない真っ白いシーツの上に赤い髪の毛の女が横たわっていた。ルプスレギナだ。  
むき出しの脚は褐色で、すらりと伸びたその脚は吸いつくように滑らかな肌だ。

男であれば誰でも触れたいと思うその肌に今触れている者がいた。

ルプスレギナと同じ褐色の肌を惜しげもなくささげ出した上半身は裸で、見事に割れ  
た腹筋に分厚い大胸筋。そこから続くぶつとい上腕筋がリズムカルに動いていた。  
ジョン・カルバインである。

「——ああ」

無意識に漏れたと思われる塗れたような声は、静かな寢室では酷く大きく聞こえた。

自分の声に羞恥を感じたのか。持ち上がった繊手がシーツを掴み、声を耐えるように  
握りしめられた。

その間もジョンの手はルプスレギナをつま先から始まり、ふくらはぎ、膝裏、ふとももの外側、内側、そして丸みを帯びた臀部へと登っていく。臀部の微妙な部分を押し広げ、ぐつと揉み上げる動きにルプスレギナの手にも力が入る。

「ん——そ、そこはあ——」

ルプスレギナの口から漏れた声に「ああ、ここがいいんだな」とジョンはもう一度、クリッと手を動かす。

「あああ——ッ！」

再び声があがる。今度はおとがいをそらして押さえきれない声を吠えるように、その身を襲う快楽を吐き出すように、声を上げた。寝室にルプスレギナのあられもない声が響いた。

「——大分、凝ってるじゃないか。農作業は疲れただろう？」

「あああ……そこ、気持ち良いですう……」

好奇心から農作業を手伝い。普段、使わない筋肉を使って疲れた果てたルプスレギナへの労りのマッサージであつた。

／＊／

モモンガの自室兼執務室は豪華絢爛な調度品の数々が置かれ、毎日メイドたちに磨かれている。真紅の絨毯が敷かれている広い室内は、以前と違いメイドたちやジョンが出

入りする回数が増え、以前の静寂のペールは薄れていたが、同時にモモンガの寂しげな空気も薄れているとアルベドは思っていた。モモンガ不在でも、ここで仕事が出来る喜びを噛み締めながら、アルベドは目の前のルプスレギナへ語りかける。

「え？食堂つすか？」

思わずアルベドに聞き返すルプスレギナ。モモンガの執務室でアルベドが語った内容はこうだ。

最近、一般メイドの従業員食堂での食事の消費量が計算よりもかなり多く。至高の御方々が定められた収支バランスが狂っている。由々しき事態だ。

その原因の調査をルプスレギナへ任せる、と。

／＊／ ナザリック時刻7：14

「ル、ルプスレギナさん！」

「驚かせないで下さいよ。もー」

突然真横からかけられた声にシクススタち3人のメイドは飛びあがって驚いた。

一瞬前まで誰もいなかった筈の場所に、眼を逸らしたほんのわずかな隙にルプルレギナが出現したのだ。足を組んで椅子に横座りし、テーブルにはご丁寧に分の食事

まで置いてある。

「心臓が口から飛び出るところでしたよ」

フォアイルに抱きつかれたままリユミエールが放心したように呟く。

「につしつし。村で実験した甲斐があつたつす」

テーブルに頬杖をつくルプスレギナは、物語に登場する猫のようにニヤニヤ笑いを浮かべる。意地の悪そうな笑い方だが、それが妙にチャーミングに見えると、シクススは戦闘メイドの笑顔に見惚れた。

「ホントにな」

もう一度、横合いからかけられた声に、今度はシクススたちだけではなくルプスレギナまでが飛びあがつて驚いた。

「ジョン様！」

「カルバイン様！」

ドキドキの取まらない胸を両手で押さえ、ルプスレギナは声の主へ振り返った。そこには先ほどまで私室で朝食の世話をしていたジョンの姿があつた。ナイフとフォークを持ち、ルプスレギナの3倍はある食事を前にしている。

「ルプーで練習した甲斐があつたな」

「ひどいっすよー」

表情のわかり難い狼頭に悪戯っぽい表情をジョンは浮かべる。不敬かもしれないが、悪戯の成功した子犬のように邪気のない笑いだと、シクススは至高の御方の笑顔に見惚れた。

ジョンはかぶっていた完全不可知の能力を持つ《姿隠しの兜》をテーブルに置くと、モグモグと気持ち良い食べっぷりで食事を再開する。

「なにしてるっすか?」

「ん? 食事」

「……朝ご飯、足りなかったっすか」

ジョン専属で奉仕しているにも関わらず食事が足りないなどメイドの名折れとルプスレギナが問いかけるが、当の本人は深い事を考えていない。

「いや、一般メイドの食事風景を見てみたくて……ただ見てるだけだとお腹すくから、っいな」

「ジョン様、食いしん坊っすからねー」

ジョンの言葉にがつくりと肩を落とすルプスレギナだったが、周囲のメイドたちは至高の御方に友達距離感のルプスレギナにハラハラしっぱなしだ。

ジョンの出現に食事どころではなく従業員全員総立ちになる。ジョンが行儀悪くフォークを咥えたまま、手で座るように促す。それに従いメイドたちが着席していく

と、人ごみの中から白いドレスに黒い翼の美女が現れた。その女性、アルベドはジョンの席へ近づきながら口を開いた。

「やはり、そうでしたか」

「アルベド？」

「アルベド様！」

守護者統括の姿に訝しげな声をあげるジョン。ルプスレギナとシクススたち一般メイドは再び驚きの声をあげる。

歩み寄ったアルベドは美しい眉を残念そうに八の字にしながら言葉を続ける。

「ルプスレギナを送り込めば姿を現して下さると思っております。いちいち完全不可知可まで使わないで下さいませ。モモンガ様の定められた美しい収支バランスが崩れてしまいます」

「普段の姿みてみたかったんだ……俺、そんなに食った？」

黙ってマスターソースの画面の写しを見せるアルベドだった。

「……思ったより食べてたな。わかった。俺のポケットマネーから出しとく。あ、それならオムレツ食べてみて良いか？」

完全不可知可つかつてると男性使用人に頼めないから食べられなかったんだと、ジョンは笑った。

## パワードスーツの可能性を求めて

ナザリック地下大墳墓へ強制就職したクレマンティーンの戦闘実験が一通り終り、訓練もマンネリかも？と思ひ始めた頃だった。

クレマンティーン又言うところの神獣様——ジョン・カルバインがその変な全身鎧パワードスーツを持ってきたのは。

白と黄色を基調として、身体にぴったりと密着する全身鎧。腹や背中などは半透明で下の肌が透けて見えるようなつくりだった。

ぶつちやけ、普段のビキニアーマーより恥ずかしいかもしれない。

……これを…着ろって、言うのかあ。

内心で遠い目をしているクレマンティーンを他所にジョンの説明が続く。

「クレマンティーン又。こいつの起動キーは、Croクoiロitzaイlronンzeゼllルgunガgnirグzizニlール。意味はへ人と死しても、戦士と生きるんだ」

嘘である。別に聖詠とか無くてもふつーに装備すれば良いだけである。が、わざわざ速効早着替えの起動キーに設定したので嘘でもない。

そして、ジョンは言うのだ。

悪魔の囁きをクレマンティーンの耳に囁くのだ。

「使つて見る。これは逸脱者への扉。使えば、お前を遙か高みへ連れて行つてくれる翼だ。……番外席次とも互角の勝負が出来るだろう。勝てるかどうかは……お前次第だ」それも嘘である。装備と素のレベル差から良くて3対7（勿論、クレマンティーンが3である）とジョンは見えていた。

だが、こういうのは気持ちも肝心でもある。最初から負けると思つて戦つていては勝てるものも勝てない。

勝てるかどうかは自分次第などと炊きつけられて、燃え上がらない戦闘者がいるだろうか。否、いないに決まっている。

ゴクリ、とクレマンティーンの喉がなった。

微かに震える手が伸ばされて、全身鎧パワードスーツに触れる。

「……Croitzalronzellgungnirzizzl」

震える声が聖詠を唱え、パワードスーツS型（通称：魔法少女タイプ）が速効早着替えの効果で一瞬にしてクレマンティーンに装着された。

同時にジョンの大音声が響いた。

「今よりそなた、その血を我らに捧げよ!!唯一アインズ・ウール・ゴウンを主とし、唯一我らにその忠誠を誓え!!その見返りとして我らが与えるは、最高最強の地位と装備と名

誉と快樂!!力と恐怖!!」

「……誓います。私の信仰を、至高の御方々へ捧げます」

クレマンティーヌは恐らく……生まれて初めて——強要でも調教でもなく——己の意志で頭を垂れた。

／＊／

その後の神都で行われた番外席次と、元・疾風走破の模擬戦はまた別の機会に。

## 農業会議と蜜蝋キャンドルと昼寝

「農地を小さくまとめよう」

リーダーの提案に相談役とエンリは首を傾げた。確かに今の人数では元の面積を耕作する事は出来ないが、あまり小さくしてしまうと来年以降の食料がなくなってしまう。二人の疑問にリーダー、ジョン・カルバインは答える。

「ダーシユ麦（大麦型、小麦型）が取り合えず出来たんだ。収穫までの時間が3カ月と当初の予定より短いんだけど、一緒に品種改良した「かぶ」と「クローバー」と合わせて1年で四輪作法を1周できる。1年で4回収穫できるから、小さくても大丈夫」

分数が通じないエンリと相談役に対して、黒板にイメージ図を書いて説明するジョン。

「そう。これだけの面積で今まで同じだけ収穫できるから……忙しくなるけど……。少し余裕を持って広めで耕作して。空いた耕作地でエ・ランテルとかで売れる作物を作ろう」

「現金収入が出来るのは良いですね。ゴーレムやスケルトンをいつまでも無料でお借りしてるわけには行きませんし……」

警備をしてくれるジユゲムたちの装備も買いたいとエンリは言う。それを良い心がけだと笑顔で聞きながら、ジヨンは続ける。

「森の方は俺たちもマーキングしてるから、そうそう危険な獣はよつてこないと思うよ」「マーキング？ですか……」

聞きなれない単語に首を傾げるエンリ。

「そ。木に爪跡を付けたり、おしっこで臭いを付けたりして、獣同士で「ここは俺の縄張りだから入ってくるな」ってするの」

「カルバイン様たちがやれば、危険な獣はよつてこないですね！」

「まーね！」

エンリの賛辞にふふんと胸を張って答えるジヨンであった。

／＊／

トブの大森林は、森は、人間の領域ではなかった。

モンスターが跋扈し、危険な獣も多い森の中は狩人でも深くまでは入れず、以前は時期を見て危険を侵して薬草を取りに入るのが精一杯だった。それとて深くまで入れないので対した量は取れなかったのだが。

今は村に強大な守護神がついたこともあり、森の辺を今までになく活用できるようになった。

木を間伐し、地面に光が届くようにし、どんぐりが多く採れる地域にブタを放し飼いにした。間伐材は薪にし、どれを間伐すれば良いのかは引越してきたドライアドたちが教えてくれる。木に光が届き、土が良い状態を保っているかも彼女たちが教えてくれる。村人たちは彼女たちの世話を焼き、代わりに森の恵みを頂くのだ。

迷子の子供を彼女たちが見つけ、保護してくれたのも村人たちとの関係構築に役立った。

樹木故に……話が単調なのに長いのが唯一の欠点だろうか。唯一、ピニスンが話してくれるジョンとルプスレギナの大冒険（第三部参照）が子供たちに人気だった。

そんな彼女たちの守る森の木陰を使わせて貰い。今まで村では出来なかつた養蜂も始める事が出来るようになった。

／＊／

ミツバチの巣を確保する為に、チーム時王たちが小さなミツバチを巣まで追い掛け、ハチに襲われながら巣を掘り出して巣箱に入れてくれたものである。……時王たちのLv的にミツバチの針なんて刺さらないので、防護服無しでも危険はなかつた。

遠心分離機がまだないので、巣ごと頂くコムハニーがメインだった。ハチの巣のかけ

らが口に残る独特の食感が好き嫌いが分かれるところであるが、エンリは気に入ったようだった。

そんなミツバチの巣をジョンは今、大きな鉄鍋で溶かしていた。

「ジョン様、何をしていらつしやるですか?」

「ああ、ルプー。ディッピングって言うてな。糸の周りに蜜蠟をつけて、キャンドルにするんだ」

ひよこつとジョンの手元を覗きに來たルプスレギナへ楽しそうにジョンは答える。

蜜蠟蠟燭は煤や黒煙を発生させずに、ゆつくりと燃え、ほのかな甘い香りがする。温かなオレンジ色の炎は、食事の色をより美味しく見せてくれると言う。

ゆつくりと、繰り返し糸を浸し(ディッピング)ながら説明を続けるジョンだったが、好奇心にキラキラとしている金色の瞳に思わず穏やかな笑いが零れる。

「ルプー。お前もやってみるか?」

「やるっす!」

二人で、ゆつくりと、糸を繰り返し浸す姿が、その日はみられたと言う。

／＊／ ナザリツク時刻 12:02

ナザリック地下大墳墓第九階層ロイヤルスイート。モモンガの執務室では午前の執務を終えたモモンガが肩を回していた。この体に凝るような肉は無いが、なんとなく凝りがほぐれるような気がするのだ。

「……お肩をお揉みいたしましたでしょうか？」

「いや、アルベドよ。それには及ばない」

揉むようなところないだろうと思いつながら、モモンガはアルベドに気遣いは無用だと答える。今日の予定を思い起こし、間違いがないかアルベドへ確認する。

「この後の予定はどうなっていたかな？」

「はっ。15時よりコキュートスガリザードマン統治についての報告に参ります。18時にはエ・ランテルにて冒険者モモンとしての……」

「ふむ。少し時間が空くな……どうしたものかな」

飲食不要、睡眠不要の身体に加えて、ブラック企業で勤務を続けられる社畜根性で、どうしても空いた時間に何かしなければならぬと考えてしまうモモンガだった。

「では、〈自己変身の指輪〉で人化して食事に致しますか？」

アルベドの提案を検討してみる。飲食不要の身ではあるが〈自己変身〉の魔法を使えば食事を楽しむ事も出来るが、時刻は既にお昼。急に自分が割り込んで料理長も大変だろう。

「それはまた今度にしよう……アルベドは、食事は良いのか？」

「私は〈リング・オブ・サステナンス飲食不要の指輪〉を頂いておりますし……出来れば、その、食事はモモンガ様とご一緒に取りたいと思います」

その言葉にそう言えば主要なNPCには維持コスト低減の為に〈リング・オブ・サステナンス飲食不要の指輪〉を持たせていたなと思出し、自分と食事を取りたいともじもじするアルベドを可愛いものを見るように眺める。もう一度、考え、精神作用無効を発動させながら、それを口にした。

「それでは……アルベド。お前が良ければ、膝を貸して貰えないだろうか」

「!!どうぞー存分にお使い下さいませー!」

ぱつと大輪の花が咲いたように表情を綻ばせると、黒い羽根をパタパタと喜びに振りながら、ソファーに腰掛け膝を差し出すアルベドに苦笑しながら、モモンガは〈自己変身の指輪〉を嵌めると発動させた。

／＊／

アルベドのふとももは柔らかく、温かく、それでいて、しつかりとした芯があった。その感触を後頭部に感じながら、モモンガはソファーに横たわっていた。以前の至高の晩餐会から、時折、アルベドに膝枕をして貰っていた。アルベドから強請る事も有れば、今日のようにモモンガから頼む事もあった。

「……昨夜はお眠りにならなかつたのですか？」

「ん。少しばかり読書が捗ってしまつてな」

「いけません。少しでもおやすみならないと、カルバイン様が心配なされますよ」

〈自己変身の指輪〉で人化して眠れとは、ジョンに良く言われている事だが、つつい支配者ロールの為の読書に精を出して眠る事を忘れてしまう。

「……そうだな。このまま、少し眠らせてくれ」

疲れなど無縁の身体になつた筈だが、精神は疲れを感じるのか？それとも誰かの温もりが眠気を誘うのか？何れにせよ。モモンガの午後の時間は、静かに、穏やかに、流れていった。

## 夕飯は養殖魚のムニエル

カルネーダーシユ村アインズ・ウール・ゴウン教会の厨房に、今日は人間形態のジョンとルプスレギナが立っていた。

目の前には様々な道具と村で取れた作物やらが並んでいる。これから夕飯の用意をするのだ。だから、毛が入らないようにジョンは人間形態になっていた。

「さてさて、先ずはこの鍊金容器に入れて一晩おいた牛乳。こいつの上澄みをへ小さな願いで冷やしながら振る」

「振るっすー！」

シヤカシヤカシヤカと勢い良く瓶を振るルプスレギナ。彼女の豊かな双丘も良く揺れる。

それを眼福眼福と眺める駄犬<sup>ジョン</sup>。

「……どのくらい振ってれば良いっすか？」

「20分くらいかなあ」

「結構、振るっすね」

「うん」

20分ほど振って塊が出来たら、ザルに濾し布を敷いたところへ瓶の中身を出して包み、軽く重して水分を抜いていく。残った塊をヘラで混ぜて更に水分を出したら、無塩バターが出来上がり。

残った水分はバターミルクと呼ばれ、栄養価も高いので料理などに使っても良いし、そのまま飲んでも良い。

「大分、少なくなっただすね」

「体積比で40分の1くらいに減るんだったかな？」

「魔法が無いと作るのメンドイっすねえ」

なんでもそうさ。と笑って、揃った材料を見直す。

リザードマンとの交易で手に入れた養殖魚。

〈小さな願い〉で作った塩と胡椒。

昼間作った小麦粉。

たった今出来上がった無塩バター。

一昨日おすそ分けも貰ったイノシシの脂を少々。

無かったのでナザリックから持ってきたレモン。

「では、今日は養殖魚のムニエルを作るぜ！」

「おーっす！」

養殖魚はトラウト（マス）のような感じだったが、餌の関係か身は赤ではなく白っぽい。それをジョンが切り身にする。ルプスレギナは切り身を受け取るとさつと水洗いして、余分な水分は飛ばしてしまう。その間にジョンはレモンを4つのくし切りしている。

「……ふんふん。そんな臭みがないから、このままで大丈夫そうだな。これに塩胡椒して、全体に薄く小麦粉をつけていくぜ」

「こんな感じっすか……」

「上手い上手い」

「うへへへ」

二人で6つほどの切り身を処理すると、今度はフライパンを温め、バター、脂を入れて中火にかける。良い匂いがし始める、が。

「おー臭いがしてきたっす。……けど、厨房のとはちよつと違うっすね」

「そりやナザリツクの1級品と比べたらなあ」

1級品しか食べた事のないルプスレギナは、ある意味で自分よりずつとお嬢様なんだよなあと、ジョンは思いながら料理を続ける。

「盛り付けた時に表になる側を下にして、焼き色を付ける。ついなら、裏返して反対側も焼くんだぜ」

「了解っす！」

「……そろそろいいかな」

器に盛り付け、レモンを添えたら。

「養殖魚のムニエルの出来上がりだ！」

平行して作っていたスープと、温めたクルミ入りのパンで今日の夕食だ。ナザリックでの食事と比べるまでもない質素な食事だ。

「料理長と比べたら全然っすけど、なんか不思議な感じっすね」

いつも食べてるものと比べれば、拙い味だ。だが、自分で、自分と愛するものと一緒に用意したものと思うと達成感と満足感がこみ上げてきて、なんとも言えない味になる。

「そりやそうだ。でも、このムニエル。外はサクツと仕上がって、中はふわつと火が通つてて、ちゃんと美味しいぞ」

「本当っすか！」

「おう！（・・▽・）bグッ！」

ジョンの満足げな表情とサムズアップに「嬉しい」と感極まって、ルプスレギナの瞳から涙が零れ落ちる。

ルプスレギナの涙に驚いたジョンだったが、食事の手を止めると彼女を抱きとめ、そ

のままルプスレギナが落ち着くまで、二人は一緒だった。

## 至高の模擬戦

どうしてこうなった？

ナザリック地下大墳墓第6層の闘技場でジヨンは空を見上げた。

自分は弱体化して、クレマンティーヌかブレインと戦って見たかっただけなのに、どうして目の前に<sup>パルフェクト・ウオリア</sup>完璧な戦士<sub>ン</sub>を使ったモモンガがいるんだろう。遠い目をしてジヨンは考えた。

最近、村や弟子、ペットを構っていて、冒険者として活動してなかった所為だろうか。変に焼餅焼きなのは、アルベドと似ているというか。アルベドがモモンガに似ているのかと納得する。

モモンガも、スケジュールの合間を縫って、コキュートスやシャルティアに近接戦闘の手ほどきを受けていたので、その成果を試したいと言う気持ちは分かる。

「さあ、ジヨンさん。いきますよ」

「ああ、魔法無し。〈特殊<sup>ス</sup>技術<sup>キル</sup>〉無しね」

ウキウキしてるのが、全身鎧越しても分かる声色だ。

5 m程の距離を無駄の減った足さばきで詰めながら、右の大剣を振り下ろしてくるモ

モンガ。素手相手の一手目としては申し分ない。

だが、ジョンは半歩前に出て、刀身を捌きながら左の回し蹴りをモンガの右腕に被せるように当てていく。

バランスを崩され、右腕を上から蹴られたモンガは、その勢いのまま身体を回転させる。すると左の肘をジョンに当てに来る。

背中からの回転で肘を当てるのは意外と難しいのだが、訓練の賜物か。肘は狙ったようにジョンの頭部を目掛けてきた。ダッキング——身をかがめ——で肘を避けると、そのままモンガの脇腹に1・2パンチを見舞う。モンガは溜まらず飛び退った。

それをそのまま逃すほどジョンは甘くない。

飛び退るモンガを低い姿勢のまま追い掛け、拳を浴びせ続ける。これがクレマンティーンであれば彼等の攻防力の差から眼を狙うしかない彼女は、高い位置にくるので対処は楽だ。だが、腰当りの低い位置から攻撃してくるジョンに、武器で対処するのは難しい。人体構造上、超接近戦では腰の高さより下にくるものに、武器の威力は発揮し難いのだ。

連撃を鎧で受けながら、モンガは両手を大きく上げて大剣をくるりと逆手に持ち替え、一息に突き落とした。

人間種には無い広い視界でそれを視界に収めていたジョンは、上からの突き落としを

八卦掌のような円を描く動きで回避し、踏み込んだ足でモモンガの足を引っかけると下方向に背中から体当たり——いわゆる鉄山靠をぶちかます！

モモンガは地面に叩きつけられながら、吹き飛び、転がりながら、地面に大剣を突き刺して立ち上がる。……全身鎧の左半身がひびだらけだった。

「ちよつとつ 〈特殊技術〉無しって言ったじゃありませんか！」

「今のは俺が覚えた鉄山靠で、〈特殊技術〉の鉄山靠じゃないよ」

「はあ——普通の人間の技術でも、100Lvで使うと馬鹿に出来ないんですねえ」  
〈特殊技術〉のネタになるくらいだからね——と笑い合う。

「二手目の肘うちが、もうちよつと早かったら良かったね。そしたら、俺はダツキングじゃなくて、スウエーで躲したから、懐に張り付けなくて、仕切り直し出来たよ」

「身体能力的に二手目は右腕の下から、突きを放つても良かったかもしれないですね。それならジョンさんはくるくる回りながら、逃げられなかったでしょう？」

「こうかな？と身振り手振りを交えて、戦闘考察をするジョンとモモンガ。」

久しぶりにギルメンと汗を流し、充実した時間を過ごせたとモモンガも満足したようだ。

## 餌付けと蒼褪めた乗り手。

／＊／ 至高回路的餌付け

その日、ジョンの元に珍しくシャルティアがやってきた。

ナザリツク地下大墳墓、第九階層（ロイヤルスイート）の一室。ジョンの私室である。ルプスレギナがいつものようにジョンの側に控えており、壁際には一般メイドの姿もある。

いつもの漆黒のボールガウン姿のシャルティアはらしくなく要件を切り出せない様子であった。

「……その……カルバイン様は最近、一般メイドたちにも……振舞われていると聞きりました」

「ん？ああ、あれかな？そうだな。少し多かったかもしれないな」

100Lv肥料で生産した野菜が多く採れたので、食事を必要とする一般メイドたちへおすそ分けしたのである。至高の御方による有機栽培とあって大変に好評だった。

「それで、その……私も……いい、頂け……れば、としんしたり……」

「ああ、いいぞ」

「ははーッ！ありがたき幸せでありんす！」

では、と立ち上がりジョンの後に回るシャルティア。首を傾げるジョンとルプスレギナ。

「いただきます！で、ありんす」

ぐぼつと口を開けて、背伸びするシャルティアの額を、ルプスレギナが後から引き戻した。

「な、な、なにをするつすか！」

「放すでありんす！私も、私も、至高の御方を頂きたいでありんすー！」

あー、そーゆー事かとジョンが達観している間に二人の争い？は続く。

「私のジョン様に噛みついて良いのは私だけっす！」

「なによ！上の口でちよつとぐらい良いじゃない！」

「上でも下でもダメっしたら、ダメっす!!」

シャルティアが本気を出したら、ルプスレギナなど一溜りもないので争いと言うよりはじゃれあいであろう。シャルティアもステータスの違いを分かかって手加減しているようであった。二人のじゃれあいを『尊い』とか思いながら眺めている駄犬であった。

焼餅を焼くルプスレギナとか珍しいものを見れたので、まあちよつとくらい良いだろう。ジョンは軽く考え、手首を自分の爪で傷つけると溢れる鮮血を紅茶ポットに詰めて

やった。

「シャルティアのおかげで焼餅を焼くルプーが見れて良かった……これやるよ」

「ジョン様！男胸さんに過ぎたご褒美つすよ！」

「身に余る光栄！ジョン・カルバイン様！万歳!!」

尚、当日中にバレーで、シャルティアは至高の御方に不敬にも何を強請っているのだと、デミウルゴスとアルバドを初めとする守護者一同から正座で説教を受けた模様。

「（エロゲーを）『買わずに後悔するなら、買つて後悔しろ』とペロロンチーノ様が仰っていた」とシャルティア語る。

／＊／ 模擬戦

第6階層、闘技場。それは円形闘技場。

長径188メートル、短径156メートルの楕円形で、高さは48メートル。ローマ帝政期に造られたそのものである。

無数の客席に座った、無数の土くれに動く気配は無い。

様々な箇所へ永続光の魔法が掛かり、その白い光を周囲に放っていた。そのため真昼のごとく周囲が見渡せる。

松明の掲げられた通路をルプスレギナとシズを従えたジョンが歩く。炎の揺らめきが陰影を作り、影が踊るように揺らめいた。

勢いよく持ち上がった格子戸を潜りぬけて、歩を進めると視界に映るものは、何層にもなっている客席が中央の空間を取り囲む場所だ。

「いらつしやい、カルバイン様。あたしの守護階層までようこそ」  
 「うん。ちよつと闘技場を使わせて貰うぞ」

出迎えたアウラに片手を上げて礼を言うと、ジョンは早速インベントリから〈全身鎧〉を取り出す。

それは全高5mほどの角ばった青い騎士鎧のようだった。

右手には角ばったヘビーマシガン。右手には大きな盾が下腕部に取り付けられている。ウエポンラックは通常の左右型、胴体に加えて、両脚、左右腕、頭部にも増設だ。腰には近接格闘用のビームサーベルも取り付けられている。

廃人ならではの時間と課金を思い切りつき込んだ一品であった。

「ふわあああ」

「……俺の〈パワー<sup>全</sup>ドス<sup>身</sup>ーツ<sup>鎧</sup>〉。ペイルライダー陸戦重装備仕様だ」

「あの赤い奴より大きいんですね」

「俺が乗る都合で大きくなってる。魔法の鎧だからな……こいつで幾つもの戦場<sup>太会</sup>を渡り歩いたものさ」

ふつと昔を懐かしむようにかっこつけるジョン。

「おお！ ジョン様、いまの歴戦の戦士っぽかったつす」

「そうか！」

「……いや、カルバイン様は歴戦の戦士でしょうが」

さて、とストレッチを始めながらジョンは口を開いた。

「対パワードスーツ戦の練習がしたいから、シズ。パイロットをやってくれるか」

「……ご下命、賜りました」

「シズちゃん「いいなあ」」

「……終わったら、模擬戦やってやるよ。シズ、オールウェポンズフリー全兵装使用自由だ！」

「Yes, sir！」

そして、闘技場はバトリング会場となった。

見た目はA T対機甲猟兵というハンディキャップマッチだが、レベル差が大きく当初は教導されている状態だったが、シズの飲み込みは早く最終的には満足のいく模擬戦が出来たようである。

その後は2 v s 2の組み合わせを幾つか試して模擬戦を行い。楽しく遊んだと報告書を提出し、モモンガに叱られた駄犬である。

## 至高の模擬戦（リサイクル） 口は禍の元

階層守護者（仮）「模擬戦……その日のそれは特殊<sup>ス</sup>技術<sup>キ</sup>無し、魔法無しの単純な模擬戦でありんした」

階層守護者（仮）「3対7。モモンガ様ガ3デ不利ト私ハ見テイタ」

匿名希望駄犬さん「アイツいつつも、3対7って言ってる気がする」

／＊／至高の模擬戦（リサイクル）

その一撃は〈完璧<sup>パーフェクト・ウオリアー</sup>なる戦士〉によって、100Lvに相応しいだけの鋭さを備えていた。薙ぎ払いの一撃はジョン・カルバイン相手では下を潜り抜けられる恐れがある為、上からの振り下ろしになったのだろう。

だが、ジョンは半歩前に出ながら、刀身を捌きながら左の回し蹴りをモモンガの右腕に被せるように当てていく。

捌きながらの回し蹴りで攻撃腕を封じるのはジョンが得意とするところだ。コキュートスも訓練で幾度も同じ事をやられていた。

それだけにモモンガの次の一手が——特に腕が2本しかない——モモンガにとって、勝利の分水嶺となるとコキュートスは見た。

バランスを崩され、右腕を上から蹴られたモモンガは、その勢いのまま身体を回転させる。と左の肘をジョンに当てに来る。

「オオ！」

動きを止めず、迷いなく、身体を回転させ、肘打ちにいったモモンガの行動にコキウトスは賞賛の声を上げた。背中からの回転で肘を当てるのは意外と難しいのだが、訓練の賜物か。肘は狙ったようにジョンの頭部を捉えている。

しかし、残像を残しながらジョンはダッキング——身をかがめ——で肘を避けると、そのままモモンガの脇腹に1・2パンチを見舞う。モモンガは溜まらず飛び退った。

「モモンガ様ノ敗北ダ」

「流石はカルバイン様。超接近戦ではカルバイン様に一日の長がありんす」

「え？……まだ勝負は分からないでしょ」

まだ模擬戦は始まったばかりと首を傾げるアウラに、シャルティアは分かりやすく語る。

「苦し紛れに下がる事を見逃すほど、物理<sup>ア</sup>火力<sup>タツ</sup>役は甘くないでありんすよ」

見なさいと、指差す先では苦し紛れに下がったモモンガを張り付くように低い姿勢のまま追い掛け、拳を浴びせ続けるジョンの姿があった。

「剣などの棍棒系の武器は、人間形態の腰より低い高さになると体重が乗せられなくな

り、威力が大きく減じるでありんす……となれば、モモンガ様の攻撃は限られてきて「……攻撃手段トシテハ、ソレシカナイトコロマデ追イ詰メラレル」

連撃を鎧で受けながら、モモンガは両手を大きく上げて大剣をくるりと逆手に持ち替え、一息に突き落とした。

「当然、カルバイン様はそれをお読みになってありんすから……」

ジョンは、上からの突き落としを八卦掌のような円を描く動きで回避し、踏み込んだ足でモモンガの足を引っかけると下方向に背中から体当たり——いわゆる鉄山靠をぶちかます！

モモンガは地面に叩きつけられながら、吹き飛び、転がりながら、地面に大剣を突き刺して立ち上がる。……全身鎧の左半身がひびだらけだった。

「装備無しでも、伝説級の<sup>レジェンド</sup>コキュートスの外殻を凹ますカルバイン様でありんすから、特殊<sup>スキ</sup>技術をスキル抜きで放つても、凄まじい威力でありんすね」

「ウム。モンクノ技、身体ノ操作技術トハ素晴ラシイモノダ」

「最後、良く見えなかつた……」

「おチビは純戦闘職ではないでありんすから、仕方ないでありんすよ」

「それを言ったら、魔法詠唱者なのにカルバイン様と模擬戦できるモモンガ様って凄いですねー」

「ホンに流石は至高の御方々のまとめ役。41人の頂点に立つ御方でありんす」

「こうかな?と身振り手振りを交えて、戦鬪考察をするジョンとモモンガ。」

それを少し離れたところから見守りながら、守護者たちもそれぞれに感想を言い合い至高の御方が側にいる幸せを嘯み締めていた。

／＊／口は禍の元

「ん?王国と帝国?」

至高の晩餐会の後にエ・ランテルから持ち帰った地図を眺めながら、デミウルゴスに問いかけられたジョンは少し考えて答えた。

「王国はいらんかな。肥沃な土地らしいし、開拓して遊ぶなら帝国の方が楽しそうだ」  
「……なるほど。そういう事ですか」

その時の言葉が後の苛烈な王国攻めに反映されるとは、ジョンは知る由もなかった。

「それに帝国の東の海上には海上都市とか言う遺跡があるんだろう。ワクワクするよ」  
「ああ!冒険者としては、遺跡となった都市の探索とかロマンがありますね」

流石、モモンガさん分かっている!分かり合う二人の至高の御方を見つめる守護者たちの瞳には、御方の望みを叶えねばと、目標を見定めたものの意志の炎が燃えあがる。

廃墟となった古代都市の近くに探索する冒険者の街が出来てたりするんですよ！  
そうそう！その酒場が冒険者の店になって、仲間を探すのに使われたりしてね！  
ゲーム。特にRPGの定番の話題を楽しそうに話すジョンとモモンガだったが、それ  
だけに守護者たちが二人の会話を一言余さず覚えようとしている事に気が付かなかっ  
た。

二人が帝国へ行き、そこで冒険者やワーカーの実情を知って、がっかりしたら守護者  
たちは一体どんな行動に出るのだろうか？

／＊／

## 至高の御方も愛用!

ルプスレギナは身体に残る昨夜の熱を吐き出し、与え続けられた快樂に半ば虚ろとなった瞳で天井を見上げる。逞しい腕に抱き寄せられれば、夢見心地で頬を至高の御方の胸に擦りつけた。

日が経つにつれて与えられる快樂が強く、長くなつていく。的確に自身を貫くその形を覚えてしまったのもあるだろう。だが、それ以上に身体を這いまわる指が、舌が、自身を開発し、快樂を刻み込んでいくのを感じていた。

愛しい御方を満足させようと、途中で果てても締め付けようと力を振り絞っていた覚えはある。その腰は抜け、いまだ余韻で意識が飛びそうだが、御方は満足して下さったのか。

いつも、この時間は不安になる。  
聞けば慈悲深い御方は「良かった」「最高だった」と深い口づけと、優しい言葉を掛けてくれる。

不敬にも、その言葉が本当なのか不安になつてしまう自分は、やはりシモベとして何処か壊れてしまっているのだろうか。

果てる瞬間、御方が満足する瞬間には、あれほどの一体感を、快樂を共にしているのに……自分はなんと欲深くなったのだろう。

／＊／

その日、ジョンはファイレーアにお悩み相談を持ち掛けられていた。

バレアレ家の工房アトリエでレイジーの不在となれば、かなり言い難い事なのだろう。

長年の思いが実り、エンリと夫婦になった筈だが、なんの悩みなのかと首を捻っていたジョンだったが、確かにそれは言い難く相談者を選ぶものだった。

「……そうなんです。エンリが満足してくれてるか、今一つ自信がなくて……」

相談とは夜の営みについてだった。それは確かにおぼあちゃんには相談できまい。

「感じてるフリなのかどうか以前に、反応が薄くて、我慢してるのか感じてるのかも分からないと……うーん」

困ったなあとしてジョンは首回りの毛を掻きむしる。自分の場合は〈特殊技能スル〉を駆使して、ルプスレギナの反応をみながらやってるので、一般的なアドバイスなどしようもない。素直にそれを言ったところ。

「僕も稽古を付けて貰って良いでしょうか……？」

などと面白すぎる返答が返ってくる。ファッシュジョンとしての格闘技は聞いた事があるが、●●●の為の格闘技とか……いや、夜の格闘技と思えば、それも有りなのか？

「……いやいやいや、ンファイくんは錬金術士だろ?自分の強みを生かすんだ!」  
「自分の……強み……?」

「そう!家畜の交配用とか言つて、人間にも効く媚薬の開発とかするんだよ。Hな気持ちになつて、感度も高まれば、お互いWinWinさ!」

出来たら、俺にも譲つてね!と付け加えるのを忘れない。

後年、カルネーダーシュ村の隠れた名産品に夜のお薬が加わった事は言うまでもない。デミウルゴスも牧場の経営に使えると、大口購入してくれて、ンファイレアのへそくりは大いに潤つたと言う。

## 漆黒の剣の昇格

「よく来てくれた」

そう言って漆黒の剣を出迎えたのは組合長のアインザックだった。なぜか魔術師組合長まで一緒にいる。新しい冒険者プレートを受け取りにきただけの漆黒の剣は恐縮しっぱなしだ。

「あ、いえ。今日は新しいプレートを受取に來ただけで……」

「そうだ！新しいプレートだ！おめでとう！」「おめでとう！」

受付嬢が真新しい4枚のプレートが乗ったお盆を持って控えている。1枚だけ色が違う。

エ・ランテルに突如として現れたアダマンタイト級冒険者「漆黒」その弟子になったという銀級シルバー冒険者だった「漆黒の剣」。彼らは漆黒に鍛えられ、エ・ランテルを襲ったアングデッド過も生き残り、金級ゴールド冒険者となっていた。

あれからまだ半年も経っていない。

それでも彼らは更なるキャリアアップを果たし、白金級プラチナに昇格した。

今日、冒険者組合長に加えて、魔術師組合長まで揃っているのはそれだけの理由ではない。メンバーの最年少ニニヤが第3位階魔法を習得し、一足飛びにミスリル級冒険者となったのだ。

「ジョジョン氏の様子はどうか？何か困ったことがあれば何時でも言ってくれて構わないとも！」

「ラケシル、落ち着け。……失礼したね。ペテルくん、ルクルットくん、ダインくん。君たちも近くミスリル級に昇格できると私は信じている。これからも頑張ってくれたまえ」

組合長が一人一人に新しいプレートを付けてくれるセレモニーなど、今まで聞いた事もない。

それだけ「漆黒の剣」が期待されている証であり。「漆黒」を特別扱いしている証であった。

あの日、クラルグルを失っても「漆黒」はエ・ランテルに取り込むべきと決断したアインザツクの決断は正しかった。

あれから半年も経たない内に、銀級シルバだった冒険者の一人がへ生まれタついでンの異能トの後押しがあつたにせよ第3位階魔法を習得し、ミスリル級冒険者に名を連ねた。仲間たちも白金級プラチナだ。

しかも、しかもである。

彼らはアンデッド過の直前に一度《死亡》しているのである。それを復活させた第5位階魔法を習得しているアダマンタイト級冒険者が街にいてくれる事の安心感。

え？カルネ村討伐軍と漆黒の剣が交戦した？

そんな話は知らないのである。聞いた覚えがありません。よってそんな記録は存在しません。ただのやつかみからの噂である。いいね？

漆黒は（特にジョジョン・シマが）他にも弟子を取って鍛えてくれている。

エ・ランテルの冒険者は長らくミスリル級が最高でようやくアダマンタイト級を得たが、ミスリル級冒険者がこれからもっと増えてくれるであろう事をインザックは疑っていないかった。

## 疾風走破

その日、彼女の前に元・漆黒聖典第9次席が現れた。

溢れ出る殺気に彼女……番外席次は眉を顰めた。

「何？貴女じゃ私の相手にもならないの忘れちゃったの？」

かちやかちやとルビクキューを弄る手を止めずに、一瞬だけ元・第9次席「疾風走破」に殺気を向ける。

だが、元・第9次席「疾風走破」クレマンティーヌは怯む事無く言い返す。

「相変わらずむかつくやつ……私は逸脱者への扉を手に入れたんだ。神人とも互角に

戦える翼装備を授かったんだ」

Croitzal ronzell gungnir zizzl.

聖詠が唱えられ、彼女は白と黄色を基調として、身体にぴったりと密着する〈全身鎧〉

——腹や背中などは半透明で下の肌が透けて見えるような奇妙な作りの〈全身鎧〉を身

に纏った。

「へえ……あの新しい神様に何か貰ったの？いいわ。遊んであげる」

壁にもたれかかって少女——番外席次はルビクキューを仕舞うと、壁に立てかけて

あつた十字槍にも似た〈戦鎌〉ウオーサーズを握る。それでも構える事無く、片手をあげると掛かつてこいと手招きした。

「ふーん。いつまでその余裕面してられるかなー」

クレマンティーヌがゆつくりと姿勢を変えていく。クラウチングスタートのポーズに近いが、立つたままでの異様な姿勢だ。ある意味、可笑しくもあるポーズだが、しかしそれは決して油断できる構えではない。

そして——クレマンティーヌが動く。

余裕たつぷりな番外席次の眼前で、限界まで引き絞られたバネが弾けたようだった。

〈流水加速〉〈超回避〉〈能力向上〉〈能力超向上〉4つの武技を同時発動し、〈全身鎧〉パワードスーツの

〈自己時間加速〉タイム・アクセラレーターまで使つての突撃。

顔から一直線に駆けていく。

それは桁外れの能力を持つ番外席次をして、信じがたい疾走であつた。

爆風が一瞬で全てを飲み込むように瞬く間に間合いを詰めたクレマンティーヌは、余裕を見せ、完全に油断していた番外席次の間合いを飛び越えて、一気にその眼前まで迫つた。

〈戦鎌〉ウオーサーズが空振りし、身体が泳いだ番外席次へ恋人に抱きつくようにクレマンティーヌが飛び込んでくる。番外席次の視界に満面の笑みを浮かべたクレマンティーヌの整つ

た顔が大きく映る。

番外席次が後退するよりも、放たれる一撃の方が遥かに早かった。全力の疾走から全身の筋力を一つのものとして使い、体重を乗せて突き出された一撃は番外席次がこれまで見たどんな一撃よりも速かった。

一閃の煌き。番外席次の肩口に深々とステイレットが突き刺さる。

クレマンティーヌの確実に仕留めると言う意志に従って、ジヨン駄が用意したステイレットに込められた魔法の力が解放される。中に込められていたのはシャルティアが込めたヴァーミリオンのヴァ「朱の新星」だ。

「ギーギャガアアアア！」

魔法が解放され、シャルティアの込めたヴァーミリオンのヴァ「朱の新星」が突き立った場所から、番外席次の身体を焼く。

「まだまだ！ 終りじゃないんだよッ!!」

〈流水加速〉

加速し、瞬時に別のステイレットを抜き放つと反対の肩口に突き立てる！ 更にそのステイレットに込められたコルンブレターターサンダー「万雷の撃滅」が解放された。こちらはジヨンがモモンガに頼んで用意したステイレットだ。肉の焼ける香ばしい匂いがクレマンティーヌの鼻をくすぐる。

そのまま両足で番外席次を蹴り飛ばし、バク転しながら10mほど離れた場所に着地する。

肩から両腕を焼かれ、床に転がった番外席次は動く様子が見受けられない。

「……舐めプしてたら両腕焼かれて、ねえ？今どんな気持ち？格下相手に両腕焼かれて、ねえ？今どんな気持ち？」

いつものあざ笑うような表情をつくり、クレマンティーヌは倒れた番外席次を挑発する。

すつとした気分だった。

これまでの鬱屈した気持ちが晴れ、光が差し込んだように心が晴れやかだった。

良く復讐は何も生まないなどと綺麗事を口にする奴がいるが、そんなのは嘘だ。心に喜びと光が満ち溢れるこの今の晴れやかな気持ちを味わう為だったのなら、これまでの屈辱も歪んだ自分も何もかも受け入れられる。それほど快感だった。

騒ぎを聞きつけて、隊長や神官長などが集まってきて倒れた番外席次と自分を見比べ、慌てて番外席次の治療に取り掛かっているが、止める気はなかった。

自分に絶望を、屈辱を、挫折を与えてくれた番外席次を地に這わせ、後悔させていると思えば、殺すなど勿体なくて出来なかった。

そうして、騒がしい神殿の最奥に背を向けて、クレマンティーヌは帰る事にした。

今の素の自分ではまだまだ神人には敵わない。ふれいやー様に下駄を履かせて貰って、相手の慢心と油断をついた勝利なのは自分が一番良く分かっている。それでも神獣様は神人と互角に戦えると言ってくれた。なら、あそこにいればいつかは自分も血を覚醒させ、隊長やあんちくしょうと互角に戦えるのでは無いかと夢を見てしまったのだ。

……難を言えば、シャルティア様の調教は、もう裏切る気は無いので終りにしては頂けないだろうか。

## メンバー召喚の可能性

「モモンガさ——ん!!」

「なんですか、のび太君」

珍しくメイドたちが扉を開けるのを待ちきれずに飛び込んできた駄犬ジョンに、モモンガは何やつてるんだと冷たい視線を向けた。

「誰がのび太じゃ。それより良い事思いついたんで、ぐりもあさんの部屋の鍵あけて下さいー!」

メイドたちに眼もくれず、ずかずかと真紅の絨毯を小走りに進みながら、興奮してるのか大仰な手振りを加えながら言葉が続けるジョン。

モモンガの視線の温度が氷点下まで一気に下がる。

「人の部屋を漁るのは関心しませんね」

「いや、ま、漁るんだけど……多分、ぐりもあさんの百科事典エンサイクロペディア残ってるよね?」

「まあ、多分?」

引退する時にモモンガに預けていったペロロンチーノのような例外を覗けば、個人で保管してる筈であるが、それが個人のインベントリであれば部屋を漁っても出てこない

のではないかとモモンガは思ったので、多分と答えた。

「ぐりもあさんって魔導書だったよね？」

「そう……です……ね」ジョン 駄犬ジョンが何をしたいのか、さっぱりわからない。

エンサイクロペディア 「百科事典を触媒にしたら、本人を召喚できるんじゃない!？」

「天才か!？」

モモンガに電流走った!

／＊

話題休憩

／＊

結局、モモンガはメンバーの私物には触れないとのポリシーを曲げて、ぐりもあの部屋を駄犬ジョンと漁り、ぐりもあの百科事典エンサイクロペディアを探してしまった。それだけ再びメンバーに会えるかもしれないとの可能性は、モモンガの心を激しく揺り動かしたのだった。

結局……とても、わがままなのだ。

ログイン 召喚するなら、〈円卓の間〉だろうとぐりもあの百科事典エンサイクロペディアを円卓に置き、そこから考え込む骸骨ジョンと駄犬。

「……で、魔法陣と召喚の呪文は？」

「いあーいあーはすたー! 違うな。……閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

「うちのメンバー、どう考えても天秤の守り手じゃないですね」

「そもそも、素そに銀を使う時点で、人狼の俺には無理だったわ。図書館の《エイボンの書》でも参考にして組むしかないかな」

どうしたものか。

鍵はある。扉も……それらしいものはある。

けれど、方法がわからない。

「うーん」

「専門の魔法詠唱者に任せたい」

再び考え込んだモモンガへ、駄ジヨン犬があっけらかんと「自分アタツカーだしい」と逃げた。

「おい」

言い出しつぺはお前だろうと突っ込みかけたが、結局モモンガは考え続ける事を選んだ。

仲間と再会できるかもしれない可能性は何物よりも、モモンガの心を魅了していた。

## 東の巨人

夜の森の中をジョンは進んでいた。

青い星空に黒い森の影。黒い木々が後ろに流れて行く。木々の枝、下草の中には様々な虫や小動物。それらを狙う肉食獣に、様々なモンスター達。木々は風に身を任せて蠢き語り合い、夜の森の番人であるフクロウの鳴き声が遠くで響く。

供にルプスレギナとリユラリユースを引き連れて、ジョンは東の巨人の住処へ向かっていった。

護衛はいつものように八肢刀エイトエッジ・アサシンの暗殺蟲とシャドウデーモンの組が周囲を警戒。飛行できるものが不可視化し、上空から監視する布陣だ。

やがてジョン達は森の切れ目に到着する。切れ目といっても、森の中に点在する木々が生えていない場所だ。星明りに照らされて、木が切り倒され当りに散らばっているのが見える。大掛かりな建築物を作ろうとして失敗し、怒りのままに投げ捨てたようなそんな有様だ。

「アウラに任せてある建物を真似しようとしたのかな？リユラリユース、グって奴は顕示欲とかがあるのか？」

「はい、神獣様。奴は知性こそ低いですが、己が強者であると奢り、力を誇示しようとするだけの知能はあります」

「ふーん。そうすると交渉は難しいか」

「恐らくは隔絶した力の差を理解できないかと……」

見張りもいない大地に裂けたような入り口を晒す洞窟をジョンは覗き込む。傾斜は浅く、奥までそれなりに広がっているようだ。天井は高く、かなり大柄な生き物でも問題なく暮らせるスペースはあるように見える。しかし――

「臭いっすね」

そう。ルプスレギナが美しい鼻筋に皺を寄せながら言う通り、下から悪臭が漂ってくる。ガスなどではなく獣脂や腐敗などの腐敗臭だ。鼻の良い人狼には一寸耐えられない臭いの強さだった。

「獣だって、自分の巣はもうちよつと綺麗にするものだけど……トロールは頑丈だから気にしないのか。〈下位呪詛レッサー・カース〉あたりで縛ってから、恐怖公に教育して貰う方が早そうだな」

足跡を見る限りは、オーガも複数体共生しているようだった。知らない足跡が東の巨人――ウオー・トロールと言う種族のものなのだろう。こちらも複数体いるようだ。

「……リユラリユースは中に入った事はあるのか？」

「申し訳ございません。儂も中までは……」

身体を縮こまらせて詫びるナーガにジョンは肩をすくめて見せた。「まあ、この臭いの中には入りたくないわな」そう言つて「それでは呼び鈴代わりに呼んでみるとしよう」洞窟の中を覗き込むと、ジョンは咆哮を放った。

洞窟の反響が激しく、正確な位置は掴めないが、少し遅れて洞窟の奥の方からも咆哮が返ってくる。

そのまましばらく待つと洞窟の奥から大量のモンスターたちが歩み出してきた。人間の身長を遥かに超える——足跡から予測した通りの2 m後半台の——大柄なモンスターたちだった。

〈妖巨人〉が6体。オーガが10体の中々の大所帯だ。

先頭に立つ〈妖巨人〉は他の〈妖巨人〉よりも体格に優れ、己への自信が醜い容貌にはつきりと浮かんでいる。武装も他の〈妖巨人〉よりも良く、何枚もの動物の皮を集めて作った革鎧らしきものを着用し、その手には巨大なグレートソードが握られていた。魔法の武器らしく、中央を走る溝からはぬらぬらとして液体が刃へと伝わっていた。

「やあ、ウオートロール。良い夜だな」

「狼人？人間に、蛇？何をしに来た！東の地を統べる王である、グ、に人間を献上しに来たのか！」

「……お前にくれてやるものなんて何一つないよ。我が軍門に下れ、ウォートロール」  
そう言つて、ジョンは彼らにも理解できる程度に気を解放し、叩き付けた。圧倒的強者のオーラを喰らい、後に控えていたりユラリユースがガタガタを震えだす。オーガ達は蜘蛛の子を散らすように逃げ出すが、不可視のシモベたちに手足の腱を切られて倒れ伏した。

「臆病者が!!我らは臆病者とは違う!お前はここで喰われるんだ!次にその人間も喰つてやる!」

「グよ。神獣様に逆らうな。大人しく頭を垂れて従うんじや——聞いてねえ」

会話の割りに頭が悪そうなのは感知能力に劣るからなのか?とジョンが考えている間に襲い掛かるトロール6体の内、4体の動きが不自然に停止する。ルプスレギナの〈全種族束縛〉によるものだ。もう1体はリユラリユースの〈火<sup>ファイヤー</sup>ボール〉で吹き飛ばされたところを再びの〈全種族束縛〉で拘束される。

グが自由なままなのは、単にジョンの遊び相手に選ばれたからに過ぎない。

大上段からグレートソードが振り下ろされる。グの持つ3mにも近いグレートソードの一撃は、しかし——

「——うっ!」

「軽いな」

ジョンはびくともしない。醜い顔を驚きで歪めたグが、今度は横殴りにグレートソードを振った。それでもジョンはびくともしない。ジョンのアイアン・スキンを抜くにはグの攻撃は弱すぎるのだ。

「むっ！」

数歩後退したグが自らの持っている剣とジョンを交互に見比べる。それから堂々と背中を見せて歩き出すと束縛されて身動き出来ない部下の前に立つ。

次の瞬間、グレートソードが翻り、部下の筈のトロールに切りつけた。肩口から入った剣はトロールの肉体を容易く断ち切り、鮮血が噴き上がる。束縛されている部下のトロールは束縛の魔法の為に悲鳴すら上げられない。

部下の身体が不自然に断ち切れ、倒れる姿を満足そうに見ていたグは大きく頷いた。武器に異常はないと確信できたのだろう。

断ち切られた肉体が早回しでくっつき再生していく。こちらにきて大きな怪我はしていないが、おそらく自分の怪我也同じように再生するのだろうとジョンは思いながら、トロールたちの寸劇を眺めていた。

「ま……なんだ。部下を大事にしない奴はいらないな」

お前は死ぬ、とジョンの手刀が大上段から振り下ろされる。邪悪な表情を浮かべながら断ち切られた部下を眺めていたグは、時間差で音もなく中央から真つ二つになって倒

れた。部下のトロールたちの目が驚愕に見開かれる。自分たちを力で支配してきた絶対的な王者の余りにもあつけない幕切れだった。

「ルプー。再生しないようによく焼いてやれ」

「了解つす！」

再生しようと左右の身体がくつつこうとしているグの身体を巻き込んで、地面から炎が噴き上がる。

ルプスレギナの〈プロウアップ・フレイム噴き上がる炎〉はグの身体を焼き尽くすまで噴き上がり続けた。

「リユラリユース、こいつらは人間の味もゴブリンの味も知ってるんだよな？」

「はい。群れに属さないものであれば、時にオーガも食していたようです」

なら、こうするかと、ジオンは残りのトロール5体とオーガ10体に『人間・亜人を食べる事を禁止する』と呪詛を掛けた上で、恐怖公の元へ送り出した。それで教育が足りなければ、蟲毒の穴にでも放り込もうと考えながら。

「神獣様。愚かな農に教えて下され。何故、あのものたちに慈悲をお掛けしたのですか？」

「ん？村のオーガは良く働いてくれるからな。あいつらの嫁になれるオーガがいるかもしれない。あとウォー・トロールはお土産だな。うちの盟主は珍しい種族に目がないんだ」

「オーガの嫁……なんと慈悲深き御方」

リユラリユースはジョンに頭を垂れた。その慈悲が自分たちの種族にももたらされるように、と。

「お前たちはちゃんと働いてくれるよ。そう心配しなくても大丈夫さ」

## 疾風走破2

ニグンが再びカルネーダーシユ村を訪れたのは収穫の頃だった。

村の周囲の畑では農民、ゴ布林、オーガにゴーレム、アンデッドが収穫を行っていた。ちらと見えたのはウォー・トロールだろうか？

人を食料としか見えないトロールまでもが共生している事にニグンは神の加護を感じ、祈りを捧げた。

村の孤児院を尋ねると、尋ね人は真面な服を着て、子供たちとメイドらに読み書きを教えている最中だった。

人は変れるものだ、この頃特に思う。

あの性格破綻者が孤児院で教師をする未来があつたなど、あの頃は思いもしなかった。

「あれーニグンさんじゃん！どうしたのー？」

一区切りついて手の空いたクレマンティーヌがこちらに気が付いて、声を掛けてくる。

それに応えつつも、神に仕える従属神たるメイドたちへの挨拶も忘れない。

「頼みがあつて来た」

「たーのーみー?」

「番外席次の相手をしてやって欲しい」

「……はあ?」

ぼかんとした様子のクレマンティーヌにまあそうだろうなと思いつつ説明をする。

「あの後、お前と戦いたいと神殿を飛び出そうとしてな。なんとか引き留めているところなのだ」

「再戦したら私まず負けるよー?」

「対等に戦える者が現れたと思つたらしくてな。ドラゴン・ロードへ竜王に発見される危険を冒して

も、来ようとしているのだ。今更こんな事を頼める間柄でも無いが、法国の……人類の為と思って、協力してはくれないか?」

「まー神獣様に聞いてみるケドー。……そもそも私の戦い方つて初見殺しだから、再戦に向いてないんだよねえ」

ところで風花じゃなくて、ニグンさんが来るとか……暇なの?

クレマンティーヌのもつともな問いに、ニグンは苦笑して答えた。

曰く「クアイエツセ殿が来ようとしていたので、直前で止めて自分が来た」話が拗れると引き止めて、陽光聖典の代わりに一人師団を竜王国へ派遣したとの事だった。ニグ

ンはこのあとエルフとの戦線に赴くそうだ。

「ニグンさん、GJ」

クレマンティーヌはニグンへ良くやったと、サムズアップと笑顔を送ると〈神獣様〉へ、遠征の許可を取る為に畑へ駆け出して行った。

／＊／

C<sup>ク</sup>r<sup>ロ</sup>o<sup>オ</sup>i<sup>イ</sup>t<sup>ツ</sup>z<sup>ア</sup>a<sup>ル</sup>l<sup>ゼ</sup>r<sup>ン</sup>o<sup>ン</sup>n<sup>ゼ</sup>e<sup>ル</sup>l<sup>ル</sup>g<sup>ガ</sup>u<sup>ン</sup>g<sup>グ</sup>n<sup>ニ</sup>i<sup>ール</sup>r<sup>ル</sup>z<sup>ツ</sup>i<sup>ッ</sup>z<sup>ィ</sup>z<sup>ィ</sup>l<sup>ル</sup>.

聖詠が唱えられ、クレマンティーヌは白と黄色を基調として、身体にびったりと密着

する〈全身鎧〉——腹や背中などは半透明で下の肌が透けて見えるような奇妙な作りの

〈全身鎧〉を身に纏った。

目の前には新しい玩具を前にしたような番外席次がある。

ついでは後には面白そうだとついてきた〈神獣様〉もいる。

「来てくれて嬉しいわ。皆、ここから出ては行けないってばかりで、うんざりしてたの」

「なーに焼かれるのがクセになっちゃった？でも、ざーんねん。今日は強火のステイレットはなーいんだー」

いつものあざ笑うような表情をつくり、クレマンティーヌは番外席次を挑発するが、番外席次は残念そうな表情をした。

「そいつは残念。今日もぎりぎりの勝負が出来るかと思っただのに」

「そうやって舐めプしてると、また痛い目みるよー」

「そうしてくれると嬉しいわ。それならこの間のがまぐれじゃないって事になるもの」

そう言つて、十字槍にも似た〈戦鎌ウオーサーズ〉を握る番外席次に一分の隙も無かった。

クレマンティーヌは愛嬌のある顔を歪めて、唇を舐めた。

スツといつてドス。

彼女の得意とする戦法は初見殺しに特化している。対戦相手を屠る為の戦法だ。突撃の速度に対応できなければ格上でも喰えるが、半面、それを知っている格上には対応され、無力となりやすいとも言える。戦士としての汎用性は同僚のブレインの方が高いと自身でも認めざるを得ないところだ。

まあ番外席次は血を覚醒させた神人だ。

喉ぐらいならステイレットで突き刺して〈火球ファイヤーボール〉あたりを炸裂させても即死はしな

いだろう。別にあんちくしょうが死んでも私は構わないし。そう割り切つて、いつものクラウチングスタートに似た構えを取る。そして〈流水加速〉〈超回避〉〈能力向上〉〈能力超向上〉4つの武技を同時発動し、〈全身鎧バワードスーツ〉の〈自己時間加速タイムアップセラレクター〉まで使つての突撃。

前回は対応しきれずに喰らった突きを、今度は番外席次は身を捻って躲す。

黒の髪が数本、ステイレットに巻き込まれて千切れとんだ。

躲され、身体ごと番外席次の脇を通過するクレマンティーヌは、身体を丸め、くると回ると頭と足の位置を入れ替える。同時に〈パワードスーツ全身鎧〉の足部に装填されているフローティング・ボート〈浮遊板〉を解放。空中に出来た足場を蹴って、強引に再突撃した！

突き抜けたクレマンティーヌへ〈ウオーサイズ戦鎌〉を振り抜いていた番外席次は、弾かれるように向きを変えて飛んできた彼女を、今度は〈即応反射〉でギリギリ躲していく。完全には避けきれず、喉元から鎖骨に掛けてがステイレットで挟まれ、血しぶきが舞った。

「……いいわ。こんな戦いがしたかったのよ」

「うへえ。今の躲されると、私にはーどーしよもないんだけどー?」

結局、勝負はクレマンティーヌの力負けで終わった。〈パワードスーツ全身鎧〉の全能力を使用すれば、もう数回は勝ちを拾えただろうが、クレマンティーヌは札を伏せ続ける方を選んだのだった。

「あんちくしょうに痛い目みせてやったと思つたら、心によゆうが出来てさー。私も大人になつたつて事かなー」とはクレマンティーヌの弁である。

## 焼き石風呂

夜である。

寶石をぶちまけたような星空は人の営みに邪魔される事なく輝いている。星々に照らされたアゼルリシア山脈は神秘的に見える。

甘く濃い大気を吸いながら、ジョンは夜の森の中を進んでいた。

捕らえたウォー・トロールとオーガは〈転移門〉でナザリックに出荷し、リユラリユースも〈転移門〉で帰した。

今はルプスレギナと夜の散歩を楽しんでいるところだった。

以前に見つけていたアゼルリシア山脈の雪解け水が集まって流れとなった溪流にたどり着く。

冷たく澄んだ水の流れに空気もひんやりとしている。

「この辺りで良いかな」

ルプスレギナに焚火の準備をさせ、ジョンは河原を掘って石を積み上げ、浴槽を作って溪流の冷たく澄んだ水を貯めていく。

人の頭ほどあるごつごつした石を拾って、しげしげと眺める。

「堆積石か……火成岩か変成岩が良いんだけどな。〈物品作成〉で作り変えるか」  
 〈物品作成〉を発動させ、火成岩を作り出すと岩の角を手刀で切り落とし、丸い石を作り出す。

2〜3度繰り返し、人の頭ほどの丸石を複数作ると満足気に頷いた。それを溪流で洗ってから〈小さな願い〉で乾かすと、ルプスレギナが用意した焚火に放り込んだ。

「堆積石じゃ不味いっすか？」

「隙間に入ってる水分で、熱すると爆裂するんだって」

「ジョン様、物知りっすねー」

人から聞いただけだよ、とジョンは頬を掻く。NPCたちの賞賛には慣れることがない。

インベントリからお盆と料理長に用意して貰っていた料理とワインを取り出し、お盆の上に並べる。

そうこうしている内に焚火で丸石が真っ赤に焼けると、それを無造作に掴んで河原に作った浴槽に放り込む。

ジュワツツと言う音とポコポコと気泡、白い蒸気が噴き上がる。

炎熱無効やヘアイアンスキンを展開しているジョンだから、無造作に真っ赤に焼けた石を掴んだのであり、一般人はやつとこ等の道具を使わないと大火傷である。

「ちよつと熱いかな？水を少し足して……こんなものか」

湯加減を調整し、人型になるときっさと道着のズボンも何もかも脱いで、お盆片手に焼き石風呂に沈んでいく。

「くああああ効く——」

冷たい外気に触れた身体が熱いお湯に温められ、一気に身体が広がってバラバラになるような解放に思わず声が漏れる。

そんなジョンの様子に笑みを浮かべながら、ルプスレギナは帽子を脱いで手早く髪を結び上げると戦闘メイド服を脱いでいく。勿論、ジョンはその様子をじつと眺めていた。

「そんな見られると恥ずかしいっすよ」

「だが、それがイイ！ガーターストッキングを脱ぐところとか、最高にエッチだ」

「えええ、じゃあ頑張つて雰囲気出しながら脱いでみるっす」

とは言え、そう言<sup>エ</sup>つた設<sup>ロ</sup>定<sup>方</sup>が特に詳しくされてる訳でもないルプスレギナ。アルベドやシャルティアと比べられては、拙いところもあるが、耳年増なりに頑張る姿はジョンにとって十分壘惑的すぎた。

「ふう」

そして、ルプスレギナは褐色の身体をジョンの脇に沈めると、星空を見上げる。

「これが露天風呂って奴っすか。最高に気持ち良いっすねー」  
「だろ。一度やってみたかったんだよな」

身体は熱く、水面から出た顔はひんやりとした風になでられなんとも言えない快適さだ。

ワイングラスを手に取り、軽くぶつけ合っただけ。

「アインズ・ウール・ゴウンに……」

「乾杯」

口に含んだワインが喉から、胃へと落ちながらじわっと広がっていく感覚が心地よい。

つまに用意されたスモークサーモンのカルパッチョも最高だ。脂乗りの良いサーモンとブラックオリーブの組み合わせも良ければ、サーモンの脂をワインで流し込むのも良い。

「そう言えば、ジョン様はお風呂の時は人型になるんっすね」

「……毛が浮くのか気になってな」

「ジョン様の人型形態を独り占めしてるよう……私は好きっすよ」

湯で上気した顔に上目遣い。ワインの所為か潤んだ瞳にジョンの愛おしさが爆発した。ルプスレギナの唇に唇が重なり、柔らかな感触に続いてぬるりと唇を割って入る

舌。ルプスレギナの腕がジョンの背に回される。ジョンの腕もルプスレギナの背に回された。

「……………」

二人の唇の間に銀の橋が掛かり、ジョンの手が瑞々しい果実のような胸の

……省略されました。全てを読むにはわっふるわっふる書き込んでください。

石に含まれるミネラルのおかげで肌は艶々になり、上がった後もずっとホカホカして気持ちよかった。

／＊／

後日、なぜかモモンガにバレて「リク・アガネイアとか未知の脅威がいる時にナニやっ  
てんですか！」と怒られた。適度な緊張感があると逆に燃えるよねと答えたら激おこぶ  
んぶん丸になった。

いつか、〈流れ星の指輪〉でモモンガさんにナニを生やしてやろうとおもいます(まる)

## カヌレせんか？

「んー甘あゝい」

エンリはカヌレを飲み込んで頬を押しえた。幸せそうに笑うエンリにインフィーレアも幸せそうだ。

ほろ苦い皮はカリカリで、もっちりとした中身からは閉じ込められた洋酒の香りが後を追う。

「でも、前に食べたのと一寸違うね？」

「前に食べたのはカルバインさんが作ってくれた奴だからね」

インフィーレアは苦笑して答える。それは村で材料が揃わない時にジョンがナザリツクから持ってきた材料で作ったものだ。

今回のカヌレは村で揃えられるようになった材料で作ったものだから、味が違うのも仕方がない。

「村で材料が揃えられるようになったからね。全部、村で採れたもので作ったんだよ」

「え？じゃあ、これ！いつでも食べられるの!？」

「うん。形も良いし、日持ちもするから〈工房<sup>アトリエ</sup>〉の商品として売り出すつもりだしね。」

「……食べ過ぎないようにね」

「うん。わかってる！ありがとう！ンファイア！大好き！」

〔自分〕<sup>ンファイア</sup>に対する好きより、お菓子への好きが多い気もするが、愛する妻に大好きと言われて悪い気はしない。それに材料は揃うようになってきたが、ジョンの教えてくれるレシピは分量の指定が細かくて正確に作れるのは錬金術士である自分くらいであろうとの自負もある。

簡単なお菓子づくりは村の女衆にも開示しているが、まず秤を持ってないし、文字や数字が読めなくて分からないので、記憶頼りになるレシピの再現度には個人個人でバラツキがでる。窯で焼くにしても、例えば180℃で5分焼いて、次に230℃で15分焼くとか出来るのは〔錬金術〕を持っていないンファイアだけだ。

錬金術士としてはあれだが、エ・ランテルで食べたどのお菓子職人よりも今の自分の方が美味しいお菓子を作れる自信がある。

それもこれもレシピを惜しげもなく開示してくれる&錬金用具をレンタルしてくれるジョンのおかげであるが、ポーション作りが一段落したら自分でも何かレシピを開発しようと思に決めているンファイアであった。

「こんにちはー！荷物を引き取りに来ましたー！」

ンファイアとエンリがお茶とお菓子を楽しんでいた〔工房〕<sup>アトリエ</sup>に、そう言って入って

きたのは冒険者のペテル・モークだった。後から仲間のルクルト、ニニヤ、ダインもぞろぞろと続いてくる。

「はい。今、奥から取つてきますね」

店の奥からエ・ランテルに卸すポーシヨン3種類——薬草から作ったモノ。薬草と魔法で作ったモノ。魔法で作ったモノ——を、それぞれ箱詰めしたものを〈浮遊板〉の魔法で作り出した板の上に乗せて、表の方に運び出す。

箱の中身は、30本20本10本ずつになる。これだけでも卸値は金貨200枚になる高額商品だ。これらは冒険者組合に卸す主力商品である。その他にカヌレを初めとしたお菓子や蒸留酒なども漆黒の剣は運び出し、表で待っていたゴブリン達と協力して馬車に積み込んでいく。

「ああ、私のお菓子が……」

「エンリの分は別に作つてあるでしょ」

エ・ランテルが王国から魔導国支配に切り替わつて、まだ日も浅い。

魔導国が人種種族を一切区別しない方針を掲げていても、やはりまだゴブリン、オーガだけの団体よりも人間がついている一団の方がエ・ランテルでは活動し易かった。漆黒の剣としても定期的に収入を得られる仕事はありがたく利害は一致していた。

他には村の未亡人などが作っている〈携帯燃料〉<sup>牛フンケイキ</sup>も冒険者組合に卸している。高速

「ノーフォーク農法」  
 〈四輪作法〉で日々の食料が安定供給できる目処がついたので、普通に育てた農作物も売り物に出来るようになったのも大きい。

「今回の売上でジユゲムさん達の装備を発注してくるんですよ？」

「ええ、お願いします。ペテルさんが契約書とかにも詳しくて助かりました」

「はは。家は継げないと思つて冒険者になつたんですが、まさかここで家での経験が活きると思いませんでしたよ」

「……人生は何があるか分からないのであるな」

最終的に馬車数台に高額商品から食料品まで満載したキャラバンとなり、護衛はゴ布林軍団10名にオーガ3名。それに冒険者〈漆黒の剣〉<sup>ブラチナ級</sup>4名と大所帯である。キャラバンを見回して、ペテルはンファイレアに零す。

「……ンファイレアさん。最近、思うんですよ。これももう商会立ち上げた方が早いよなあーつて」

「あははは……」

「冒険商人も悪くないんですが、もつとこう冒険したいなーつて贅沢な悩みですね」

後年、漆黒の剣のペテルは冒険商人として名を馳せる……かもしれない。

## ゴブゴブゴブ？

エンリは畑の石を拾い集めていた。畑の中に石が混じっていると耕す時に農具を傷つけるばかりでなく、根の張りも悪くなる。冬になって作物が無くなった今やつておかないといけない重要な仕事だ。冬にする事がないなどと言う事は無いのだった。

籠に集めた石を降ろし、額に浮かんだ汗を手の甲で拭って背伸びをする。

屈みっぱなしだった腰が伸びて心地よく、冬の澄んだ空気を胸いっぱい吸い込む。そんなエンリの元に息せき切って駆け込んだきたものがいた。

トブの大森林で薬草採取の際に助けたゴブリンのアーグだ。

「あ、姐さん！エンリの姐さん！ちよつき！た、大変なんだ！き、聞いてくれ！」  
「ど、どうしたの？落ち着いて」

アーグの慌てように何かあったのかと思ったエンリだが、けが人が出たならジユゲム達も報告に来るだろうし、新しくジョンが連れてきたオーガやウオートロールが何かやったのだろうか？

何度かアーグを宥め、深呼吸させて、やっと落ち着いて話が出来るようになった頃、アーグが口にした言葉は一寸ばかり理解不能だった。

「う、うちの奴らとオーガゴブリン 最初の5匹がちやんと喋るようになったんだ!」

「はあ?」

我ながら間の抜けた表情だったと思う。アーグ達が人間の表情を読むのが苦手であった。

アーグに連れられて村の広場に戻ると、ジューゲム達がアーグの部族の者たちと最初に村に来たオーガ5人を囲んで何やら話し込んでいた。

良く見ると呼ばれてきたのか、ンファイレアの姿もある。

「やあ、エンリ。アーグに呼ばれてきたんだね」

「ええ、ンファイ。みんなが喋るようになったって聞いたんだけど……?」

「話をしてみれば、直ぐにわかると思うよ」

そう言われて、首を傾げたエンリだったが、取り合えず彼らに挨拶を試してみる。

「こんにちは。……今日は皆は西の畑の担当だったよね?」

「押忍! エンリ族長! 俺たち、今日は西の畑を耕していた」

「ん?」

最初から違和感があったが、少し言葉を交わして理解した。

これまでは片言でしゃべっていたのに、今日は非常に流暢に話す。それこそ村人やジューゲム達と話すのと変らないレベルだ。

「あれ？昨日……ううん。今朝までは普通……だったよね？」

「族長、俺たち何か悪い事をしてしまったのか？」

「ううん。そんな事ないよ！何も悪い事なんてないよ！ただ雰囲気之急に変わったからびつくりしているだけ……なんだけど」

ちらりと見るとンファイレアも難しい表情をしている。

「まるで皆、ホブゴプリンになってしまったようだよね……僕もこんな事例は聞いた事がないから、コークスさん達に頼んでカルバイン様に連絡を取って貰ってるんだ」

「そっか。それなら、安心かな」

それまでどうしようかと考えて、結局のところ身体に異常がないのなら畑仕事を続けるとの結論に至った。

オーガの怪力は貴重なのである。……見てると力も強くなったような気がする。

／＊／

「エンちゃん、久しぶりっすね。今日はどうしたっすか？エンちゃんが呼ぶから、バハ

ルス帝国から跳んできたっすよ！」

ニコニコとルプスレギナがエンリに語りかける。先ほどまで帝国の中央市場でジョンと買い物デートしていたからか、非常にご機嫌だ。

エンリをからかっているルプスレギナを横目にジョンは、ンフィーレアやジユゲム等から状況を聞き込む。

「旅行に行かれてると聞いてたのに、すみません」

「なに気にするな。直ぐに魔法で行き来できるんだからな」

「ありがとうございます。それで実は……」

一通りの話を聞くとジョンは満足気に頷いた。

「うんうん、アーク。皆お前と同じホブゴブリンになったようだぞ。良かったな」

「え？俺ってホブゴブリンだったんですか……？」

自分の頭をポンポンとするジョンを見上げて、アークは目を丸くした。

「そうだぞ。知らなかったのか？」

「俺……ずっと、自分が変なのかと思って……そっか、俺、ホブゴブリンだったのか」

安心したように、気が抜けたように、俯くアークの足元には水滴が小さな染みを作っていた。

ジョンはアークの頭をわしわしと撫でてやりながら、「アークは強い子だ。大丈夫お

前はまだまだ強くなれるよ」と言葉を掛けてやった。

アークを撫でながら、ジョンはインフィレアに向き直る。

「……それで今回のは目に見えて実験の効果が出てきたって事だな」

「実験……ですか？」

「実験といつても、そう大したものじゃない」

そう言つてジョンがインフィレアに語つたのは……

この世界では知能がある程度のレベルに達しないと、言葉を理解できなかつたり、流暢に話せなかつたりするようだ。

今回の事は簡単に説明すると「レベルが上がつてINTが閾値に届いたから、流暢に話せるようになった」と言う事になる。

もつと分かりやすく言うと「成長して、言葉を流暢に話せるようになった」と言う事。しかし、ここで言う成長とは普通に食事をして身体が成長していくのとは違う。

冒険者が危険を潜り抜け、危険なモンスターとの戦闘を繰り返して、人間離れた身体能力、生命力を獲得していくように、普段の生活でも安全に危険なモンスターとの戦闘を繰り返していけば、人間やゴブリンでも成長できるのでは無いかと言う実証実験。

その成長の結果だと言う。

先日の討伐軍との戦闘で騎兵の突撃を受け止めたりした膂力も、村人たちが気づかな

い内に成長していた結果であり、村に来てからファイアが第3位階魔法に開眼したのも、レイジーが第4位階に達したのも、その結果らしい。

今回は片言でしか話せなかった彼らが急に流暢に話し出したので、目立っただけで変化はずっと前から村の中にあっただけと言う事だった。

それでゴブリン達はホブゴブリンに進化したのだろうとのジョンの見立てだ。

「安全に危険なモンスターとの戦闘って……もしかして」

「そだよ」

チーム時王の植物型モンスター畑の朝の収穫祭。村人からは「疲れにくくなった」「力が強くなった」「白髪が減った」「まな板が切れた」「腹筋が割れてきた」など喜びの声が寄せられていた。

「あれは全部、朝の収穫祭のおかげなのさ。体力だけなら今の村の皆は、金級冒険者にも引けは取らない筈だ」

「でも、俺らは変らないと」

ジュゲムが肩をすくめる。

「召喚モンスターであるジュゲム達は成長しないっぽいな。すまん」

「それが姐さんの安全に繋がるなら、何も問題はねえっすよ」

先を見通して様々な手を打つジョンや、自分が変われなくとも愛するエンリの安全に

繋がるなら構わないと言うジユゲムの言葉。

ンファイレアは彼らに大人の漢を見て、頭が下がる思いで一杯だった。

——僕も彼らに並べるような大人にならなくては。

新婚のンファイレアはそう決意を新たにするのであった。

## 埋もれ木

トブの大森林内部。

150mも進むと温度が数度下がる。それは単純に日差しが入ってこない為だ。とは言っても完全に真暗になる訳ではない。ひんやりとした空気の中をジョンは進む。

大森林はいつもの通り静けさが支配していた。梢の揺れる微かな音と、時折木霊する鳥獣の鳴き声以外はほぼ無音。ジョンの足音もほぼ聞こえない。

昆虫や獣には薄明薄暮性——明け方と夕方にも主として活発になるものが多いので、昼間の方が虫が少なかつたりするのだ。

大自然を堪能しようとして全力で呼吸して歩くと、怯えた獣やモンスターの移動が始まって森が荒れると、ジユゲムから苦情を貰ったので現在は出来るだけ息を潜めて歩いている。

「葉草の場所は覚えていて、あとで教えてやろう」

ふんふんと鼻を鳴らして、水の臭いを嗅いだでは進む方向を修正する。

やがて、森の中の沼地の辺、湿地にたどり着く。

湿地には周囲の木々からの落葉や倒木などの堆積する速度が、微生物などの分解速度

を上回っているらしく泥炭になって堆積していた。

泥炭はわずかな荷重で圧縮されるため、泥炭地は地盤として流砂並みに軟弱であるが〈特殊技術〉〈軽身功〉で体重を限りなくゼロに近付けたジョンは沈むことなく泥炭地の上を歩き回れる。

「畑の土壌改良に少し掘りに来ても良いかもな……さて、ここにはあるかな」

この辺りは深そうだな……泥炭地の深みを見つけると、そこを掘ると言うよりも潜っていく。

たぶん。

と、湿地の水面に波紋を残し、周囲は元の静けさを取り戻す。

梢の揺れる微かな音と、時折木霊する鳥獣の鳴き声以外はほぼ無音の世界となつて、数分いや十数分だろうか。

水面が波打ち、ごばあッ！と黒い丸太を啜えた人狼ジョンが水面へ飛び出してきた。

全身をぶるぶると震わせ、水を吹き飛ばすと啜っていた丸太を担ぎ、そのまま上機嫌で帰路に着いた。

／＊／

カルネーダーシユ村に戻ったジョンは拾ってきた丸太を水堀で洗うと風呂屋の裏手で乾かしつつ、自分は風呂呂に入って泥炭地に潜った汚れを落とす。

「リーダー、何拾ってきたの？」

「埋もれ木だよ。埋もれ木」

「埋もれ木かー。何か細工物でも作るの？」

「うん。雁首と吸い口はもう作ってあるんだ」

「おー煙管かー」

時王のメンバーと会話しながら、身体を乾かし、着替えると裏手に回って丸太を魔法で乾かす。

丸太が乾いたら、手刀で適当な大きさに切り出していく。

「道具を使え、道具を」

「一応、知的種族だろうに」

大雑把に形を削りだしたら、道具を使って仕上げていく。

表面を削り、割れないように注意しながら、内部をくり抜いていく。

綺麗にくり抜いたら、表面を磨いて仕上げだ。

予め作って置いた雁首と吸い口を繋げれば、埋もれ木の煙管の出来上がりである。

鈍い色合いと手触りが堪らない逸品が仕上がった。

さつそく刻みタバコを詰め込んで、火を点ける。

タバコをそつとゆつくり吸う。

煙の味は甘めで、口当たりは丸く冷やかな感じだった。

「ふむふむ。悪くない。もう1個作るか」

タバコならモモンガも死オーバーロードの支配者の姿でも楽しめるだろう。

デトネーション波あッ!!ってカッコイイよね？

〈死者の大魔法使い〉が20体。エ・ランテル郊外の演習場に整列していた。

その前に立つのは青と白の毛並みの人狼。ジョン・カルバインである。

「よし！それじゃ説明した通り〈伝言〉で同期を取りながら、同時に〈火球〉を的に打

ち込め！」

〈死者の大魔法使い〉が20体が動き出す。

実験台らしい〈骨の竜〉の周囲に、小さな20個が〈骨の竜〉を囲むように配

置されている。

《エルダー1。射線確保》

《エルダー20。射線確保》

《こちらエルダー1。〈火 球〉発射準備完了》

《エルダー20。〈火 球〉発射準備完了》

《こちらエルダー1。〈火 球〉発射カウント開始。3……2……1……発射》

《死者の大魔法使い》20体から、人の頭ほどの炎の玉が標的に向かって寸分の狂いもなく発射される。それは完璧な同期を持って、〈骨 竜〉の周囲20個の的に着弾。着弾と同時に弾け飛び、内部にため込んだ炎を一気にまき散らした。

同時に炸裂した20の〈火 球〉は内部に向かって衝撃波を同時に放つ。その衝撃波は互いに押し合い圧し合い内部の標的を圧縮する！

標的を中心に縊り合された衝撃波と爆炎は出口を求めて上方へ逃げ出す。それは爆轟波となつて上空へ放出されるとキノコ形の雲を作り出した。

「……………」

ジョンの前で凝縮された〈火 球〉の爆炎が噴き上がる。稲妻のような轟音が響き渡

り、演習場を波打たせるような突風が吹きすさび、激しい土煙が立ち昇る。それは火山の噴火のようであり、炎を巻き込みながら土煙は巨大なキノコ形となった。

予想以上の破壊の顕現にジョンの口から思わず声が漏れた。

爆炎と土煙がおさまった後には上から押しつぶされたように、ペしやりとうづくまる姿勢の〈骨の竜〉があった。第6位階魔法までを無効化する〈骨の竜〉だが、スヶリトル・ドラゴンファイヤーボールによる爆縮で発生した爆轟波によって、地面に押し付けられ、その背中には大きくヒビが入っていた。

このような実験を繰り返し、完全耐性と言っても実は上限があるのではないかと疑うモモンガにより、警戒レベルが更に高まる事になるのであった。

ただ、アンデッドの集団でなければ精密な同期が取れないとか、〈火球〉が着弾しないと炸裂しないので予め空中に的が必要とか、色々条件があり、実用性は皆無とされた。

ファイヤーボール

## 新年の祭りどうしましょう。

／＊／

カルネーダーシユ村を囲む巨大な水堀の辺にジョンとルプスレギナはいた。

風の穏やかな。冬の日差ししの温かい日だった。簡易な椅子とテーブルを並べ、アルゼリシア山脈を眺めながら二人は珈琲とカヌレを楽しんでいた。カヌレのほろ苦い皮はカリカリで、もっちりとした中身からは閉じ込められた洋酒の香りが後を追う。

「ンファイくんも、なかなかやるっすね」

「そうだな。やっぱりお菓子は計量が命だから、錬金術士じゃないと難しいのかもな」

村の婦人たちに教えたレシピは秤がなかったり、数字が分からなかったりで、きちんとして作れてないのだった。

ジョンはそれを思い出しながら、ンファイレアの作ったカヌレを二つに割ると片方をルプスレギナへ差し出した。受け取ろうと伸ばされたルプスレギナの手を避けて、「ん」とも一度差し出す。

ジョンの意思を察したルプスレギナは恥ずかし気に瞳を伏せると、そっと口を開く。

絶世の美女を意のままにしている事にジョンの支配欲が満たされる。その口に割ったカヌレを押し込んでやると少し、大きかったのかハムスターのようにもつきゅもつきゅと頬張つてる。そんな顔も愛おしくジョンは表情を崩した。

「ああ、良かった。カルバイン様、ルプスレギナさん、やっと見つけた」

そう言つて、村の方からやってきたのはエンリだった。

ルプスレギナはカヌレを飲み込むと、ジト目でエンリを睨む。

「むーエーンちゃん、空気読んで欲しいっすね」

「え!? 私、その……お邪魔……でしたか?」

邪魔つすよーと両手をあげて抗議するルプスレギナを横目に、ジョンが「どうした?」とエンリに問う。

問われたエンリは「新年のお祭りについてなんですけど……」とおずおずと話し出した。

村として、死の神アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下を祭るような新年の祭りにしたいの事が何か良いアイデアはないかとの事だった。

「……やっぱり生贄つすかね。エーンちゃんとか素敵じゃない?」

「えーわ、私ですか!？」

話しながら、真顔になって生贄にはお前が良いと言われ、エンリは背筋が凍る思いだ。しかし――

「こらー！生贄はいらないうって言われてるだろ」

真顔になったルプスレギナの頭に、ジョンの手刀が軽くトンと落ちる。

「てへぺろっす」ルプスレギナは美しい顔に愛嬌のある笑顔を浮かべて誤魔化す。けれども眼が、少し恐い。

「そうだな……リザードマン 蜥蜴人たちは魔導王陛下下の山車とか獅子舞みたいなものを作るって言うてたな。……せつかく水路も通ったし、連携するか。リザードマン 蜥蜴人たちの作った山車とかを、

船でここまで運んできて村でそれを迎えて歓迎する祭りをするってのはどうだ？」

「それは素敵ですね！そしたら、リザードマン 蜥蜴人さんたちを迎える準備も必要ですね」

「うん。だから、エンリを村の代表として一度、リザードマン 蜥蜴人たちのところへ連れて行くから用意してな」

「はい。わかりました」

そう返事をしながら、エンリはつい半年前までは唯の村娘だったのになあと遠い目をした。

うまい!うまい!

／＊／

陸地に置かれた2 m近い焚き火台から、紅蓮の炎が夜空に届けとばかりに燃え上がっていた。その巨大な赤い光源によつて夜闇は遠ざけられている。

今日は〈<sup>リザードマン</sup>蜥蜴人〉5部族が一同に会して初めての年越し、新年の祭りだ。

焚き火台の近くには《酒の大壺》が置かれ、何十人という〈<sup>リザードマン</sup>蜥蜴人〉が入れ替わり立ち替わり、その壺の中の酒を汲み上げる。尽きる事のない酒は、人間の味覚からすれば味はそれほどでもないが、〈<sup>リザードマン</sup>蜥蜴人〉からすれば美酒であった。

その味は今日、集落を訪れたカルネーダーシユ村の村長エンリ等は眉を顰める一品であつたが、一緒に訪れたゴ布林やオーガ達は気に入つたようだった。

族長が勢ぞろいしての宴の席は、人間の感覚からすると貧相に大地に直接座して酒を酌み交わしている。椰子の実にも似た木の実を割つた殻を杯として使い、透明ながらも強い発酵臭が漂う酒。酒のツマミは生の魚だ。もつとも今日の魚は綺麗に切り身にされており、その脇には調味料が添えられている。

「おー！こりやうめえな！」

「確かに……なんとというか……美味しい」

「うまいーうまいー！」

幾つかある調味料の内、黒い調味料。初めは敬遠されていたが、つけて魚の切り身を食べるとこれまでに味わった事のない味の奥深さを感じられ、すっかり虜になった族長たちである。

「気に入ってくれたのは良いけど、味への語彙が貧困だなー！」

そう言って追加の皿を持ってきたのはジョンであった。神獣様と立ち上がり礼をしようとする族長等を手で制し、ジョンも地面に胡坐をかく。

「その黒いのは虫醬つてな。カルネーダーシユ村の近くの平原で取れる虫から作ったんだ。魚からも同じようなものが作れるから、後で作り方を教えてやるよ」

見るとチーム時王の面々も同じように皿を持って、リザードマン〈蜥蜴人〉たちの間を歩き、彼らには珍しい食べ物を振舞っていた。

やがて、リザードマン〈蜥蜴人〉達が考えたアインズ・ウール・ゴウンを讃える祭りの踊りが始まる。それはリザードマン〈蜥蜴人〉数人で獅子舞のような形状のモモンガを模した被り物を被り、族長前の広場でうねるように踊る。モモンガの特徴的な顔と肩回りに力の象徴として竜のうねる胴体を足したような感じだろうか。

ジョンからすれば祭りなのだから、何も言う事は無い。

モデルにされたモモンガは後で録画された動画を見て、微妙な表情をしていた。

モモンガ獅子舞は族長たちの広場から始まり、5部族の集まりを順番に巡ると最後に水路に繋がる栈橋につけられた舟に乗り込む。

舟は全部で5艘あり、それぞれに漕ぎ手としてチーム時王の面々が乗り込んでいた。

5部族の族長と随伴者、エンリ村長とその随伴者護衛のゴブリン、オーガ達も分散して、舟に乗り込む。

〈<sup>リザードマン</sup>蜥蜴人〉たちの歓声を受けながら、舟は人狼の力強い漕ぎでモーターボートのような勢いで加速、発進する。

エンリやクルシユの悲鳴を夜闇に響かせながら、舟はカルネーダーシユ村を目指し、水路を一直線に走り出していった。

# 宴だツ！

／＊／

カルネーダーシユ村から見る夜のアルゼリシア山脈とトブの大森林。

暗く明るい夜空に染みるように黒い影となっている。その中にはチーム時王が新たに掘った湖とカルネーダーシユ村を結ぶ水路の影もある筈だ。だが、静かな水路は今日  
は騒がしい。

村から見る水路の影に幾つかの明りが見えてきた。

それと共に人とも獣ともつかない叫び声のようなものが風に乗って微かに聞こえてくる。

それに応じるように村からも歓声があがり始める。

「きたきたきた！」

「誰だ!? 誰の舟が一番だ!？」

この世界の舟にあり得ない速度で明りは大きくなってくる。明りは舳先に吊るされたコンテニユアル・ライトへ永続光を掛けられたランタンの光だ。

「うおおおおおッ!」「腕よ!俺の腕よ!持つてくれ!」

「トップは貰ったあああッ!」「風だ!風になるんだッ!」

全員50Lv相当に力を揃えてのボートレース。当初は驚いていた族長たちも(クルシユ・エンリ除く)勝負事に熱くなり、それぞれの舟のチーム時王メンバーを応援し、夜闇を切り裂いて進む舟の速度に興奮していた。

トップでゴールしたのはジョンが漕ぎ手の舟だった。

レベルを時王と揃えても、クラス構成上の筋力と敏捷、耐久の違いが勝因だろう。

ウイニングランにカルネ<sup>リザードマン</sup>ダーシユ村の水堀を(ゆつくり)一周する。

〈<sup>リザードマン</sup>蜥蜴人〉の族長たちは、初めて見るカルネ<sup>リザードマン</sup>ダーシユ村を囲む壁の巨大さに圧倒されていたようだった。

一周し、棧橋に舟が次々に接舷して、族長やアインズ獅子舞を降ろしていく。

エンリやクルシユは眼を回したのか、少々ふらつき気味だ。

「うう、酷い目にあつた」

まあまあと、別の船から降りたンファイレアがエンリを宥めている。

ジョンやチーム時王の面々は歓声と共に迎えられている。その声には「あんたを信じてた!」「一番になるって信じてたぜ!」「ありがとう!ありがとう!」「儲けさせて貰った!」との声が多い。

そう、武王の嫁取りに帝国から来ていたオスクが親になってポートルレースで賭け事を行っていたのだ。

武王もカルネⅡダーシユ村に来ていた。ウォートルロール達と顔合わせし、双方悪い印象は無く良い感じであったと言う。

翌年以降、武王に倣って新年の祭りに合わせて結婚の申し込みをするのが流行ったらしい。あとポートルレース（賭け事）も。

アインズ獅子舞はカルネⅡダーシユ村を練り歩き、人々に祝福を授けていく。

カルネⅡダーシユ村の広場には宴の用意が整えられている。

〈<sup>リザードマン</sup>蜥蜴人〉に合わせて用意された料理は、スモークチーズに出来立てのキツシユ。朴葉で包んだヒメマス。ボタニカルに山椒を使った酒だ。

冷たくも心地よい風が流れる。

チーム時王の演奏も始まり、宴が始まる。

人間も、〈<sup>リザードマン</sup>蜥蜴人〉も、ゴブリンも、オーガも、ウォートルロールも、区別なく肩を組んで歌い踊り、美味しい料理と酒を食べて飲む。

圧倒的な力に支配された…まだ、ここにしかない小さな世界。

それでも……皆が笑っていた。



宴の一角に大柄な者たちが集つた場所があつた。

オーガやウォートロールと言つた身長2 m後半の者たちだ。

「村ここは良いけど、エ・ランテル買ひ物で街いくと造りが細かくて気を遣うよな」

「うんうん」

「道の選び方とか気を遣う」

何度が買ひ物について行つた事のある者たちが、まだエ・ランテルに出てない者たちに解説しているようだ。

「古い石畳割つちやつたり、未舗装だと足跡がついて、後の人が躓いたり、馬車がひっくり返つたりな」

「あと市場が怖い!」

「人に躓くし、路上に積んである商品も間違つて踏みそうになる!」

「街歩きにはコツがあるんだよ」

そう偉そうに始まつたのは最初期に入村したオーガ3人の1人だ。複製されたへ酒の大壺から汲み上げた酒を大きなジョッキに並々と注いで上手そうに飲みながら言葉を

続ける。上手そうに↓美味そうに だと思えます。

「とにかく『摺り足』。足をあげない事さ。市場の建物はほとんど全部天幕だから、踏んだり寄りかかると大惨事だからな」

チーム時王のグリル厄介でレベルの上がった彼らの会話は人間のように流暢だ。何も知らない冒険者などが見たら驚愕する事だろう。

流暢に喋る大きい者同士、武王もリラックスしているように見える。

「でも、やっぱり建物が無いところが一番落ち着くね」

「それな！」

「私は時々ピニスのトコ言つて、夜通しおしゃべりしてるー」

この雰囲気には絆されたのか。武王は短い時間を共に過ごしたウォートルの1人に結婚を申し込み。毎年、里帰りと呼びかけてくるようになるのだった。

## 新人研修

／＊／魔導国大使館の庭

レイナースはがくりと膝をついた。ぶわつと額から汗が滲み出し、あつと言う間にそれは流れとなって地に零れ落ちる。

顔を上げる余裕もない彼女に上から幾つもの声が掛けられた。

「所詮は下等生物<sup>ガガンボ</sup>。これで戦闘メイドとは笑えますね」

「戦闘メイドを名乗るにはひ弱すぎますわね」

長らく己を苦しめていた〈呪い〉から解放されたレイナースは帝国四騎士を辞して、魔導国に仕える事にしたのであるが、そこで課せられたのは〈戦闘メイド〉と言う聞いた事のない役職であった。理解した内容によると、メイド兼護衛であろうか。主人の近くに仕えながら、武器の携帯を許された特別な存在。

魔導国でも6名しかいない役職だと言う。

剣の腕前には自信があった。ガゼフなどには及ばなくても女の身でありながら復讐を果たし、帝国四騎士の中で最も攻撃力に秀でた『重爆』の二つ名を持っていたのであ

る。だが、そんな自信は粉々だった。

魔導国でも6名しかいない役職にある6人のメイドたちの美貌はまさに絶世。取り戻した己の美貌など霞んで見えるものだ。メイドとしての技量も超がつく一流。過去にメイド修行を多少した事のある自分が及ぶものではない。

せめて、戦鬪の面ではと思っていたが、先輩にあたるナーベラル・ガンマとソリュシャ・イプシロンによって、その抛り所も経った今粉々になった。

鍛錬を怠った事は無い。

それでもそんな自分が息も絶え絶えになっているのに、この二人は息を乱してもいないのだ。根本的に基礎体力が違い過ぎる。

これほどの美貌と身体能力を持ち、メイド兼護衛として主人に仕える彼女たちの誇りはどれほどのものだろう。

良くある新人いびりだが、能力が隔絶し過ぎて、納得の感情しか浮かんでこない。

これだけの能力のあるエリートの中に自分程度が紛れ込めば、それは確かに面白くないだろう。

そう思っていたところにタオルが投げかけられた。

ふわっと頭に掛かるタオルからは洗いたての良い匂いがした。

「ご苦労さん。……お前たちも、こういう事するんだなあ」

ちよつとびつくり。そんな事を言いながら現れたのは館の主人であるジョン・カルバインだった。

「カ、カルバイン様！」

「お、御前、失礼いたしますー！」

突然の主人の出現に慌てて首を垂れるナーベラルとソリュシヤン。それを気にした風もなく「良いよ良いよ」と手を振るジョン。

「責めている訳ではないんだが……幾つか教えて欲しい。これは新人いびりで良いのか？そして、どうしてこの行動に出た？」

レイナースからすると不思議な質問だった。本当に責めている様子はなく、興味深く二人の行動について知りたいと言う欲求が感じられたのだ。頭を垂れたままのナーベラルとソリュシヤンの顔が動く。

「——ナーベラル——ソリュシヤン」

「……は、はい、カルバイン様」

じつと3者の視線が交差しあう。

やがて、ソリュシヤンの唇が動いた。

「く、悔しかったんです」

その先はナーベラルがソリュシャンには言わせなかった。

瞳に涙を浮かべ、ナーベラルはジョンに訴える。その先はソリュシャンに言わせる訳にはいかない。

「何故！何故なのですか！このような下等生物、ミジンコ戦闘メイトに相応しくありません！確かに姉は戦闘メイトとして不真面目な点もありました！しかし、このような下等生物を新たな戦闘メイトとは認められません！」

「……認められない？俺の言葉を？」

ジョンは心底驚いたと言う表情で、狼頭の眼を見開き、ぱちくりとさせた。

ナーベラルとソリュシャンは絶望に満ち満ちた表情をしている。至高の御方の言葉を認められない……その罪の重さは如何ほどだろう。

極刑は避けられまい。いや、極刑以外であってはならない。

「——面白い。面白いぞ、二人とも！」

空を見上げて哄笑を放つジョンを、ナーベラルとソリュシャンはポカンと見上げた。

「良い。良いぞ。二人とも、お前たちの全てを俺は許そう。……それと別にレイナース

はルプーの代わりではないぞ？ルプスレギナ・ベータは戦闘メイド・プレアデスの一員のまま、新たにジョン・カルバインの妻になったのだ。レイナースは唯の戦闘メイド・無印だ。お前たち姉妹に加える訳ではない。……姉妹にも良く話しておけ」

ポカンとしたままのナーベラルとソリユシヤンの頭に、ジョンはインベントリから取り出したタオルを投げ掛けると、順に二人の涙を拭ってやるのであった。

# オーガ料理は君に決めた！

／＊／うどーん。

「うどーん！ばわー！」

ドシーン！ドシーン！とカルネーダーシユ村の広場から柔らかいものを叩き付ける音が響いてくる。

「神獣様ーこんなに力一杯やって大丈夫なの？」

「大丈夫、大丈夫、いけいけごーごー！」

ジョンが笑顔で返した相手はオーガの一人だ。知能が向上した為か料理などに興味を向ける個体も出てきており、何か自分も料理をしてみたいと言ってきたオーガに、なにかオーガの特性を生かした料理はないかと考えた末が「うどん」だった。

大雑把に説明すれば、大きなボウルは無いので——大きな鉄釜に小麦粉と塩と水を入れて、捏ねて捏ねて出来上がったうどんタネをオーガパワーで叩いて伸ばす。

人間なら全体重を掛けて足踏みするところだが、身長2 m後半で横幅もあるオーガのパワーなら手捏ねで人間以上のコシが出せるだろう。

そんなオーガパワーで捏ね捏ねして、2時間ほど寝かせたうどんタネがこちら!

流石にオーガパワーで捏ねたうどんのコシは凄まじく、オーガが全体重を掛けながらでないと上手く延ばせないようだ。

「俺がやれば簡単だけど、頑張れ!」

「ふんぬー!ふんがー!」

真ん中から徐々に四角形に広がるように延ばしていく。

オーガの頑張りで良い感じに広がったら、打ち粉をかけて、畳んでやって、オーガ用の大ぶりの包丁でズダンズダンと切って……

「完成!」

「やったー!」

「食べるのはまだ早い!茹でてから!」

「えー完成って言ったのに」

茹でたうどんを器に盛り、豚肉やきのこなどを煮込んだ汁につけて食べる。つけ汁うどんにしてみた。

一口啜り、プチッと噛みちぎる。

口の中で跳ねるようなコシが感じられる。このコシの強さは人間では再現できないオーガ料理だろう。

「うんうん。これだけ美味しいなら街で店を出せるかもな」

「本当に!? うーん、頑張ってみようかなあ」

敵つい顔を喜びに染めながら、オーガはそう言つて笑つた。

／＊／オラサーダルク、君（の骨）に決めた！

「モモンガさーん。オラサーダルクの骨全部ちよーだい」

執務室にやってきたジョンのお願いに、モモンガは報告書をめくる手を止めて視線を上げた。

「あれは使い道を決めたところなんです……」

「本当は死体全部欲しかったんだけど、多分、骨格だけでも媒介に出来ると思うんだよね！」

「媒介？ 何に使うんです」

「うちのリンドウ（課金ガチャのドラゴン）の永続召喚の媒介」

「ああ、レベル足りませんかね？」

ジョンのペットのドラゴンは限界まで成長させてあったはず。へ<sup>グラスブ・ハート</sup>心臓掌握<sup>ハート</sup>一発で死亡したドラゴンの骨格でレベルは足りるだろうか。

それに対しての答えは「骨格を補強してみるよ」との事だった。

ふむ、とモモンガは考え込む。

竜の骨はもう一体分ある事だし、副官NPCに匹敵するリンドウを永続召喚できればナザリックの戦力的には、そちらの方がメリットが大きいかと考える。

「まあ良いでしょう」

オラサーダルクの骨の使用を全部中止すると、ジョンへ骨格一式を明け渡すように指示を出すのだった。

リンドウはリンドブルム型の巨大な蛇のような長い胴体に一對の前足、蝙蝠のような翼を持つドラゴンだ。

一欧州では稲妻や流星はリンドブルムが発したものとされる伝説を持つ飛行速度に優れたドラゴンでもある。

少し細く、蛇に似たところのある霜<sup>フロスト・ドラゴン</sup>の竜の骨格は媒介に丁度良いように思えた。

第6階層での召喚実験は成功。続けての時間経過もペットの召喚時間を過ぎても送還される事なく存在し続ける事が出来た。

これにより、90Lvを上回り、モモンガの副官NPCに匹敵する戦力を常駐させる事が可能となった。

取り合えずはシャルティアのドラゴン航空便に所属し、足の速さを活かしながら、ドラゴンの交配なども視野に入れつつ、活動して貰う事となった。

## 豚肉竜骨スープ

／＊／豚肉竜骨スープ

「何故ここに呼ばれたか、わかりますね？」

「え!？」

モモンガの執務室。真紅の絨毯に正座させられた駄犬ジョンの間の抜けた声が響いた。

霜フロスト・ドラゴンの竜の骨。ペットの永続召喚に使うって言いましたよね？」

「うん、言ったよ」

「で？召喚に使う前に何をしやがりましたか？」

駄犬ジョンは眼をそらした。

「何をしやがりましたか？」

「……な、何故……それ……を……？」

「カルネダーシユ村であった事は逐一報告するように命じているのですよ……ルプスレ

ギナにー!」

「なッ!？」

ガ——（；。口。）——ン!!と擬音のつくような表情を駄犬ジヨンは作った。振り返れば申し訳なさそうにペコペコしているルプスレギナがいる。

『お前には失望したぞ!』と言つて見たかったが、言つたら大変な事になりそうだったので、それは止める駄犬ジヨン。

「ちよつとだけ!ちよつとだけ!だったから!ほら!召喚も問題なかったし!」

「黙らつしやい!!そのちよつとだけで:出汗を取つたせいで失敗してたら、貴重な霜フロスト・ドラゴンの竜の骨一式が消滅してたところなんですよ!!」

「……だから、一応は補強したし—」

「最初から、そのつもりだったのか!この駄犬ジヨンがああッ!!」

執務室にフアイヤーボールへ火球球が乱れ飛んだ。

／＊／その前日

カルネーダーシユ村の広場でオーガに料理を教えながら、巨大な骨を巨大な寸胴で煮込む駄犬ジヨンの姿があつた。

「うんうん。なかなか良い出汗が取れるじゃないか」

これはヘジンマールとかには食わせられないな。封神演義になつてしまふ。などと  
思いながら、前に作つて置いていた日本式のチャーシューを加えて、つけ汁うどんのスープ  
を作っていく。

「オーガとかトロール向けには太目に切つた麺を短めに茹でてくれ。ゴブリンとか人間  
向けには細めに切つた麺を長めに茹でるんだ」

「ジョン様ー私の分はー?」

「ルプーの分は太目短め。オーガ向けと同じで頼む」

匂いを嗅ぎつけてきたルプスレギナにはオーガ向けと同じレシピで出せと、オーガに  
指示するジョンだった。

えーオーガと一緒にすかあと不満げだったルプスレギナだったが、豚肉竜骨スープう  
どんを一口食べると眼の色を変えた。

「え? なんすかこれ! すごく美味しいつすよ!」

そうだろうそうだろうと頷くジョン。

「うどんはオーガの怪力で人間には出せないコシを出して、スープはモモンガさんから  
貰ってきた霜フロスト・ドラゴンの竜の骨から出汁を取つて煮豚を加えたんだ。竜の骨はしばらく手に  
入る当てがないからなー良く味わつて食えよー」

ちようどそこで畑仕事を一段落させた村人たちが戻ってくる。村人たちにオーガ料

理（うどん）振る舞い始めるジョンとオーガ。

その為、ルプスレギナに「モモンガさんには内緒な！」の一言が言えなかったのだ  
た……

## 戦闘狂はMつケたつぷり

／＊／ 第六階層 円形闘技場 ／＊／

「おお。こりや厳しい」

ペツと折れた牙を吐き捨てながら、ジョンは呟いた。

戦闘開始から僅か数分。

〈自己変身〉で50Lv相当まで弱体化しているジョン・カルバインは転移後、最大級に追い詰められている。

「……まだー続ける?」

黄色をメインカラーとするパワードスーツ（シンフォギア仕様）を着用した金髪ポブカットの少女が、エクストライブ風にマフラーを翼のように広げ、空中からジョンを見下ろす。整った顔立ちは曇り気味で圧倒的優位に立ちながらも顔色が冴えない。

その少女……クレマンティーヌのちらちらと動く視線の先には、階層守護者のシャルティア。その他、ルプスレギナ、一般メイドたちが射殺す眼でクレマンティーヌを見つ

めていた。火傷しそうな熱視線だ。そのスポイトランスは仕舞って欲しい。

パワードスーツを着用し、神人たる番外席次とも戦える力を得たクレマンティーヌだが、それでも届かない高みにいる守護者に殺気を向けられては溜まらない。

「力でも何もかも捻じ伏せられる感覚は久しぶりなんだ……もう少し遊ぼうぜ」

脳筋〈戦闘狂〉のMつケたつぷりな感想にクレマンティーヌはげっそりとする。

「ちゃんとフォローしてくれないと私が死にそう」

「皆わかってるから大丈夫……死んだら、事故死」

ジョンの事故死発言に場を包む殺気が物理的な重さも伴うように増す。

クレマンティーヌに、いつもの間延びした話し方をする余裕も無い。

「神獣様、やめてください。(私が) 死んでしまいます」

そうは言っても〈神獣〉様の命令は絶対なのだ。

仕方なしに空中から地上に下り、クレマンティーヌはクラウチングスタートのような独自の構えを取る。

テレフォンパンチも良いところだが、ステータスに圧倒的なレベル差がついている以上、今のジョンには視認することすら難しい速度で走り出す。

手を抜くとばれるので、〈流水加速〉〈超回避〉〈能力向上〉〈能力超向上〉4つの武技を同時発動し、〈パワードスーツ〉の〈自己時間加速タイム・アクセラレーター〉まで使つての突撃。

顔から一直線に駆けていく。

一方、ジョンは激流を制するのは静水と言わんばかりに、〈明鏡止水〉〈天地上下の構え〉で迎え撃つ。

単独では「天地魔闘の構え」を再現できないジョンであるが、天と地。

すなわち攻撃と防御による2回行動で突撃のレベル差を埋めようとしていた。

そして、それは正史においてブレインがそうしたように己の限界を超えようと足掻く行為でもあった。

本来、反応すら許されない速度を無意識無想に繰り出される特殊技能〈無想陰殺〉と〈獣の勘〉で反応する。

〈無想陰殺〉は間合いに入った攻撃に自動でカウンターを繰り出す。その特性を〈回し受け〉に付与し、クレマンティヌの攻撃を防御する。

しかし、レベル差故に完全に防ぎきれない。

〈アイアンスキン〉で強化された青い獣毛が血飛沫と舞う。観戦者の中でシャルティアだけが、それを視認し、歯を食いしばって声を堪える。ぎりつとスポイトランスを握る

手に力が籠った。

同時に〈無想陰殺〉の特性が付与された〈正拳突き〉。それがカウンターで繰り出される。

〈無拍子〉〈浸透勁〉〈手加減〉を上乗せされた〈正拳突き〉は重い金属同士がぶつかり合うような轟音を幾千の戦士の雄たけびのように奏であげ、ぶつかりあう2つのエネルギーは土煙を上げて円形闘技場をもうもうと覆い隠す。

そして、土煙が静まった時、背中合わせに数十m離れたジョンとクレマンティーンの姿があった。

ジョンは脇腹を向こうが見えるほど大きく抉られ、ボタボタと血を流しながら残身を取っている。

一方、パワードスーツの防御を抜かれたクレマンティーンは本来30Lv少々のHPであり、カウンターによるダメージ増加もあって、50Lv相当の攻撃は〈手加減〉のおかげで即死を免れた状態だ。

「……クレマンティーンヌ。お前、手え抜いたろ？反応が間に合ったぞ」

「してません！あん畜生とやる時と同じ、本当に全力でした！」

クレマンティーンヌ必死の叫び。同時に身体の深奥を打ちぬかれたクレマンティーンヌの身体は限界を迎え、彼女は鳩尾のあたりを抑えながら、ガハッと吐血しながら倒れて

いく。

背中越しに本気の匂いを嗅ぎ取って、ジョンは

「……そうみたいだな。疑って悪かった……」

そう言って、そのまま力尽きたようにがくりと膝をつく。

急速に暗くなっていく視界と手足の先から感覚が霧散して、世界に溶けていくような感覚。

弱い身体で全力をふり絞った。弱い身体で全力をふり絞り、より強きに挑んだ。

力を出し切り、可能性を掴み取った充足感。

精神が満たされ、身体が世界に霧散していく快感よ。

「ああ……今日は良い日だ……」

己の周囲をシャルティアや一般メイドたちが取り囲んでなにやら言っているのが、薄暗くなっていく視界の端に見えた。

回転する自らのチャクラが空気に接続されていくような奇妙で充足感に溢れた感覚に、満足の吐息を漏らし、瞳を閉じた。

〈大<sup>ヒー</sup>ル<sup>ル</sup>復〉

一瞬のうちに傷が塞がり、失った血が血管をめぐり始める。心臓は力強くポンプを始め、意識を通常状態へと引き戻す。

充足感も世界に溶けていく解放感も失われた。

「……イイところだったのに……」

「本当に死んじゃうからダメです！」

叱ってくるルプスレギナへ、ジョンは心底に残念そうな表情で零す。

「そうです！お隠れにならないでください！」

「……皆は別に死んだわけじゃないぞ？」

シャルティアの悲痛な声にボソッと呟くが「ジョン様、そう言うことじゃないですよ」とルプスレギナが顔をひくつかせながら続ける。

「これでも余命40秒までは我慢したんつすよ」

〈マスター|||サブアン主人|||使い魔〉間のラインが繋がってるルプスレギナならではの計り方だった。

「もう一声！」

シモベ達を悲しませた事を省みないようなジョンの声にルプスレギナは静かに切れたのか。

「モモンガ様に言いつけます」

「すいませんでした」

流れるような土下座だった。

効果はバツグンだ！

至高の御方を脅すような物言いだだったが、シャルティアも一般メイドも誰もルプスレギナを責めなかったと言う。

## その頃のカルネ・ダーシユ村：時王

／＊／ その頃のカルネ・ダーシユ村 ／＊／

冬の寒い日であつたが、そこは暖房がなくてもぽかぽかと暖かい場所であつた。

冬にも関わらず暖かい時期にしか育たない作物。暖かい地方でしか育たない作物が青々とした葉を伸ばしていた。

カルネ・ダーシユ村の一角につくられたそれは南国ハウス（ビニールハウス）だ。

別に時王の建築技術を持つてすればガラスを使った温室を作る事も容易かつたが、ジョンがライトノベルで読んだ菜種油に塩化硫黄を加える事で出来るビニール？ハウスを作つてみたかつたのだ。そもそも家屋に使つている《環境防壁》があれば、外気温—18〜38℃の時、結界内部を21℃に保つ性能があるので温室は必要ない……とか言つてはならない。

一般にビニールハウスなどに使用されるポリ塩化ビニルとは異なり、ゴムに近い性質を持つ物質だが安価で量産が効く。

ビニールほどの重量あたりの引つ張り強度を持たない欠点はあるものの、シート状にしてハウスの被覆にするには申し分ない性能を備えていた。

花粉が外に流失しない利点もあるので、南国の農作物の他にダーシュ麦の改良などのユグドラシル産の農作物の改良にも使われている。

村の開拓もだいぶ進み、ヤーマ、コークスは村の未亡人と良い感じになって結婚の許可をジョンに貰いに来たりした。異形種と人間種の間なので子供は出来ないだろうが、連れ子を可愛がっているようであった。その時の二人のコメントは「開拓チーム時王。捕まえられないのはジョンの嫁だけ」と言われてたけど、リーダーが結婚したから良いよね、である。

マツシユは村の巨大な水堀で数種類のエビの養殖を始めた（このエビはローブル聖王国でのジョンの活動の際に炊き出しのかき揚げとして提供された）。

ナーガンは味覚センスの謎の高さを活かし、移動式スパイス栽培車とか製造して、カレーなどのスパイス料理の再現に挑んでいる。

サペトンは農業知識で皆を助けながら、猫や犬に囲まれ、晴耕雨読の生活を送っていた。

週間焼き討ち大会であったユグドラシル時代と比べたら、全員が概ね平和で満たされた日々を過ごしている。

相変わらず世界を忙しく飛び回り、「今度はダーシユ海岸だ！港を取ってくる！」と傭兵モンスターを引き連れ旅立った冒険を続けるリーダーの帰りを待ちながら、〈釣れたか丸〉……今度こそ出来るのか、とナーガンは期待に胸を膨らませた。

／＊／

村に石窯は作ったが、間伐材を活かす為の施設がなかったので、時王の面々はピニスンが管理する領域の近くに炭焼き小屋を建てて事にした。

「「開拓チーム時王は！安全！確認！丁寧！仲良し！」」

作業前に建設予定地で安全祈願と作業前の気合を入れるヤーマ、コークス、マツシユ、ナーガンとサペトン。

また開拓に参加できないわけだが、外出してるリーダーが悪い。

窯位置を出し、窯底を作り始める。地均しをし、下の地盤と縁切りする為に丸太を並べていく。丸太を並べたら粘土を打って地盤の打ち固めをする。この時、煙道口に向かつて3%程度の傾斜を付ける。

内側を三日月型に削った石を縦に2枚並べて幅60cmほどの点火室を作ったら、次は小割りした石を使って排煙口を作る。排煙口にはあらかじめ作っておいた素焼きの土

管を立てる。

これもあらかじめ用意した耐火煉瓦を積み上げて窯側壁を作る。外側は粘土を張り付けて崩れないように補強する。

壁が出来たら最後は天井だ。

丸太で窯壁の高さに型枠をつくり、切子等で天井の形を作つて紙などで覆う。覆つたら、軽石、焼土、セメントで練つた天井材を一気に打ち上げ、良く突き固める。あとは1週間ほど乾燥させた後、型枠材を燃やして内部を乾燥させる。

その間に木酢液の採取装置を取り付けたり、窯を覆う小屋を建てたりする。これで安定して炭を生産する事が出来るだろう。

村では魔法の品物で通常の煮炊きに燃料は必要なくなつたが、エ・ランテルなどの都市や周辺の村々ではそうもいかない。炭は貴重な現金収入の当てになるのだ。

まだまだ人手も足りないカルネ・ダーシュ村。時王からはコークスが代表で炭焼きを面倒みる事になった。

ジョン・カルバインの夢見るほのぼのファンタジーライフはここにあった。

トーナメントはやらないよ！

／＊／

三重城壁エ・ランテル。

魔導国の王都となったこの都市は現在、亜人と人が闊歩し、ドラゴンが飛び交い、勞力としてアンデッドが使われる混沌とした都市になっていた。

その一角にアダマントタイト級冒険者ジョジョン・シマが開いた道場がある。

アベリオン丘陵の亜人連合にラゴン族はジャジャンと言う名の似た勇者がいるが、名前が似てるだけである（13巻78p）。

幾人もの冒険者の戦士や子供たちが広い庭で素振りや打ち合いを行っている。

その中でブレイン・アングラウスは子供たちを相手に木刀で試合を中心に実践的な剣術を教えていた。ブレインの好みとしては素振りを何百回もやったり、筋力トレーニングなどで身体を鍛えるよりも、実戦で斬り合う経験の方が鍛錬よりも役に立つと信じていた。

しかし、彼を圧倒的な力で粉碎した可憐な化け物の上司である神獣様が身体を鍛え、

素振りを行う鍛錬も大事と言うのだから、それはそれで効果があるのかと思いはじめるところでもある。

そんなブレインの目の前で〈ブラチナ白金〉級冒険者であるペテル・モークが悲鳴を上げていた。

「し、師匠お今日はいつもより絶対重いです!!千切れる!首が!足が!腕が!」

体中に重りをつけられ、馬歩とか言う空気椅子のように腰をとしたまま静止する姿勢を取らされている。限界を超えて出来るようにとご丁寧には杭に縛られ、腰を落とさないように尻の下にも剣呑なものが置かれている。

「安心しろ。そう言って千切れた奴はまだいない」

「基礎体力はもう付きましたよ!まだやるんですか!?!」

「武術つてのはお湯と一緒だ。常に熱を加えなければ、直ぐに水になる」

そう言って同じ様に見えるが遥かに重い重りを付けて、ペテルの横で馬歩をしているジヨジョン・シマの姿があった。

あ、ブレインの修行の時、1回腕が千切れたわ——師匠——ッ!!

ジヨジョンの思い出しに、聞きたくなかったとペテルの叫び。気の毒そうなブレインの視線。

レギナの回復魔法で腕はつないで貰ったが、あれは酷い事件だった。その後、段々と

手加減が上手くなってきたので、ペテルにはもう少し頑張つて欲しい。他の道場生の為に。

「英雄の領域へ行くんだろ！まだまだやれる！」

「え……俺、そんなに才能ありますか？」

「いや、どうだろう？」

「酷くないですか!？」

「正直、どこまで強くなれるなんてのは分からないな。ただ積み上げなければ強くはなれんし、ペテルはまだ伸びると思うぞ」

褒められて満更でも無いペテルの背後で、時刻を告げる鐘の音が響いた。

「あ、鐘が鳴ったから終わりですね」

「喋る余裕があるから、（次の鐘が鳴るまで）もう1セット」

「師匠——ッ!!」

地獄の鍛錬の成果もあり、ペテル・モークはニニヤに続いてミスリル級への昇格を果たすのだが、それはまだ少し先の話。



エ・ランテル郊外に真なる冒険者育成の為、モモンガの命令によりダンジョンを建築していたマーレだが、その上に巨大な建築物もつくっていた。

セカンドナザリックを建築していたアウラに助言を受けながら作り上げた。それは第六階層にあるものと同様の帝政ローマのコロッセウムだ。

バハルス帝国の闘技場でジョンが活躍したと聞き、魔導国にも同様の施設がなければと使命感に燃えたのだ。

人間の帝国にあるものが、魔導国に無いなんて！これである。

シモベたちの独断で作られたものであるが、自主的な活動にモモンガは喜んだ。……

巨大モモンガ像には眉を顰めたが。

ジョンは喜び早速、魔導国、法国、王国、帝国へ腕の覚えのあるもの来たれと檄を飛ばした。

第1回最大トーナメント・アインズ杯の開催である。

阿鼻叫喚の予選会を勝ち抜いたのは以下の8名。この紳士淑女により決勝トーナメントが行われる。

「暗黒街からやってきた！裏社会最強の男！顔を隠さなくて大丈夫かアツ!?」 闘鬼  
ゼロ

「大剣二刀流は男の浪漫！アダマンタイト級は伊達じゃない！」 漆黒 モモン

「アベリオン丘陵最強はこの俺だッ！強者を倒して名をあげる！若き魔爪ここにあり  
！」 魔爪 ヴィジャー・ラージヤンダラー

「ザナツク新国王の本気を見よ！フルアーマーガゼフここに！」 王国最強 ガゼフ・ス  
トロノーフ

「御前試合の借りは返す！最強秘剣を引っ提げて推参だッ！」 居合 ブレイン・アング  
ラウス

「俺より強い奴に会いに来た！帝国闘技場から八代目武王が来てくれた！」 巨王 ゴ・  
ギン

「胸ではなくて大胸筋! 筋肉、筋肉、やっぱ筋肉だな! 最強戦士はこの俺だ!」 謎多し可憐なる戦士” ガガーラン

「超技! へ暗黒刃超弩級衝撃波オオ!!」 王国最強の乙女! 戦場に咲く一輪の花!」 蒼薔薇” ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ

大会参加中はこれまでの犯罪歴など不問とし、逮捕拘束されませんが、” 闘鬼” ゼロおよび山賊に身を寄せていたと情報のある” 居合” ブレイン・アングラウスは” 王国最強” ガゼフ・ストロノーフ、” 蒼薔薇” ラキユース、” 謎多し可憐なる戦士” ガガーランに敗北した場合、勝者に捕縛される可能性があります。

ジョジョンとクライムは予選敗退し、ジョンは優勝者と戦うつもりで待機している。

待て! 続報! (続かない)